

空間と時間における社会的行為の決定について

ナイジェル・スリフト
(遠城明雄 訳)

Nigel THRIFT

On the determination of social action in space and time,
Society and Space, 1, 1983, 23-57.

© 1996 by Pion

「社会的諸関係が人間の現実的な本質として(言い換えると、人間に関わるすべてのことの根本的な説明の基盤として)、理解されないとしたら、反対に人間は、その本質としての社会的諸関係の基盤において理解されないだろう。いずれにしても観念論者による人間の概念へと陥るであろう。」(Sève, 1978, p.426.)

1 序論: 翻訳(translation)⁽¹⁾の問題

最近 10 年間ほど、人文地理学者はますます社会理論と関わるようになってきている。このような関わりは、いくつかの構造主義的マルクス主義のアプローチの極端な決定論、つまり資本主義の一般諸法則あるいは諸傾向によって場所の特異性 the specifics を説明しようとするものから、多くの「人文主義的 humanistic」地理学⁽²⁾の極端な主義、つまり人間の相互行為の特異性を通して場所の一般的な諸特徴を把握しようとするもの、へと広がっている。しかしながら人文-地理学的な主題の本質から、既存の社会理論を人文地理学者が論じることはたいへん困難を伴うといっても過言ではないと私は考える。その理由は非常に簡単である。通常は、社会事象について非常に抽象的に一般化されているものを、特定の時間での特定の場所の諸特徴やその場所での「諸個人 individuals」(あとで議論されるように、これは使用するのが難しく、また問題を孕んでいる用語である)の諸行為に関連づけることは非常に難しい。勿論これは人文地理学に固有の問題ではない。社会史家たち Social Historians は、その関心の焦点が『人間を取り囲む環境から環境における人間』(Stones, 1979, p.23)へと移動してきたことで、いくつかの同一の問題に直面している。つまりとりわけ

この主題が、心性 mentalité の「思考し-行動に移すこと thinking in-acting out」を説明するために、「諸個人」の選択された事例を利用することに移ってきているので。

この翻訳 translation の問題は、いかにして克服されるか。また本当に克服され得るのか?。今まで言われてきたことでいうならば、この問題は社会構造と人間の主体的行為 human agency の間の対立、経済と文化あるいは決定論と自由意志に与えられる相対的な重要性をめぐる論争の形式でも知られている対立として今日、人文地理学に表われている。確かに現在、「主体的行為」や「経験」といった単語は、人文地理学において、効果的なお守りになっている。それに言及することは、演習室のあちこちで物知りのうなずきを引き起こすが、おそらくその理由はこれらの用語が、現在構成されたものとしての社会理論のほとんど自己説明的な批判を示しているように思われるからである。しかしながら構造の主体的行為への関係という問題に対するこの一見すると同質的な対応には、実は少なくとも四つの主要な流れがある。その極端な場合は、全体的にみてもあまりにも多くの分野が、構造的な社会理論へ引き渡されてきたということを含意している⁽³⁾。このことは、それ自体として与えられているので所与のものだけを扱い、規則性の詳細な記述を理論と常に誤解

している経験主義者にとって当然十分に、魅力的な命題である。しかし、その核心に「人間 man」という範疇をもつ人間学的哲学を切望する人文主義者のなかにも同じような人々を見い出せる。[『The Poverty of Theory and Other Essays』のなかで E. P. トムソン Thompson (1978) がいくつかの点で、実際にこの両方の誤りを犯していることに注意することは興味深い]。大マルクス主義者によって支持される第二の対応は、社会理論が小スケールのものと唯一的なものに適用されるとは意図されてこなかったということである。二者択一の状況が存在するように思われる。その選択は一般理論か唯一的な記述か、である。おそらくこうした対応は、一部のマルクス主義者の分析を特徴付ける具体的なものを単なる抽象的なものへ、そして社会科学を哲学へ、という還元主義に部分的に帰因している⁹。しかしおそらく、社会現象を単に一般化するものとして、(社会)科学と科学的言説を概念化することによりまだに結び付けられる社会理論のひとつの見方にも部分的にはつながっている。[したがって本稿は内容において「実在論者」である(Sayer, 1981 と比較せよ)]。それは、『一般化された準機種のなかで、(その共通の諸特徴に反するものとしての) 諸状況の唯一的な諸側面に関与することの可能性を考えることは否定される。なぜならその問題は科学的分析の従来の基準にとって一見して処理しにくいからである』(Layder, 1981, p. 49.) という見解の意図されざる結果である。したがって小スケールでの人間の相互行為の重要性が最小限に評価されることは確実である。第三の見解は、社会科学の理論的な重心における重大な移動が要請するが、この移動は社会的行為に関する諸理論を補う社会的行為(あるいは慣習行動 practice)の理論に依拠した新たな「構造化論者」の問題設定へとつながるだろう(Dawe, 1979)。これは人文地理学においてかなりの支持を獲得している見解であり(例えば、Carlstein, 1981; Gregory, 1981; Pred, 1981b; Thrift and Pred, 1981 を見よ)、またたとえば歴史社会学(Abrams, 1980; 1982)や行政学(Ranson et al, 1980)のような他分野において、最近の発展の試金石として現在、注目されつつある。第四の見解は、私が本稿で支持しようとするものだが、唯一的な出来事に関する一般的な知識を生産することが可能であるというものである。しかしこの見解は、構造化論者らの関心と既存の社会理論、特にマルクス主義の社会理論とを相互浸透させることで

最もよく達成される。なぜならマルクス主義は、そのはつきりとした罪そしていくつかの省略にもかかわらず、決定 determination という強力な概念を備えているからである。確かにこうした拡張は、多くのマルクス主義者にとって以下の主張を前もって示すことになるので忌まわしいものになるだろう。

『日常生活の物質的慣習行動——あるいはさらにいうならば民衆信念の構造——に関心を没頭させることが、マルクス主義者の視点からなぜユートピア的であったり、あるいは望ましくないのかは明らかではない。個人的でありふれた見方とグローバルで総合的なそれとを対立させるいかなる理由もない』(Samuel, 1981, p. 11)。

しかしながら以上のことは、例えば過去の日常生活に関心を寄せてきたいくつかのテキストに見出すことができる「まとまりのない印象主義 rambling impressionism」(Abrams, 1982, p. 328)に、私が好意をもっていることを意味しない。むしろ私は、「現実の人間存在の現実世界」への理論的に構造づけられたアプローチを求めているのであり、この世界は、マルクス主義者の伝統の実質的な部分をまさに特徴づけている『観念論者の抽象化の極端な形式によってはうまく把握され』(Selbourne, 1980, p. 158)ない。

したがって本稿は以下のように整理される。現代社会理論を要約的に展覧することで、私が構造化論「学派 school」と呼ぶつもりでいる四つの主要な関心を考察することになる。私はこれらの関心が、「コンテクスト的 contextual」であると同時に、「合成的 compositional」な諸決定を説明しなければならない非機能主義的なマルクス主義社会理論にとってきわめて重要になると主張したい。そして本稿の最後の部分で私は、社会理論がより小スケールにそして唯一的な出来事の考察に拡張された時に、そうした社会理論がどのようなものになりはじめるのかの輪郭を素描することになるだろう。新しい種類の地域地理学/社会学はこの企図に統合されるだろう。

2 構造と主体的行為をめぐる問題への二つの応答: 決定論と主意主義

大部分の社会理論は自省的ではない。ある時代が支配的な社会経済的諸条件によって決定される時に、社会理論はある時代の理論的かつ実践的な思想のなかで

それ自身の起源を考察しない。したがって、なにが考えられるべきものであるのか、そしてとくに人間的「言語—思考」が依拠している単純な陰喩的等価物を提供し得るどのような題材があるのか、が考察されない(Bourdieu, 1977; Keesing, 1981; Lakoff and Johnson, 1980を比較せよ; Thrift, 1979を見よ)。しかしながらいかなる社会理論家も、非常に部分的な場合を除いて、自らがそのなかで社会化された社会に基づいて思考することを逃れられない。そうでないとしたら明らかに決定論者の理論の集合であるマルクス主義がなぜ、19世紀の厳しい経済的な強制(そしてそれに伴う労働不安)の下で誕生したのか。同様にフランクフルト学派の社会に対する悲観的な見方と1920、1930年代のワイマルドイツや国家社会主義ドイツとの間につながりがないと信じることは全く不可能である。マルクス主義や現象学の様々な諸形態と同様にその内容と目的において多様な諸理論はすべて、その理論が利用し得る知識の限界とこの知識を諸理論に結び付け得る方法とによって制約されるのであり、この両者はある特定の時間に同じ社会の子供となったことの結果として理論家たちに課されるものである。特に資本主義下で誕生した社会理論は、資本主義の多くの特徴、とりわけこのシステムの根本的な諸矛盾を反映しているにちがいない。

啓蒙、そして宇宙の秩序という観念が次第になくなったことによる知的な空白以来、人類は部分的には資本主義の原因であり、また結果でもある二つの傾向によってとじ込められてきた。第一は、社会の生産と再生産が生じるスケールと規模が一見すると絶えず拡大していく傾向である。資本の持続的な集中化と中心化(マルクス)、人口の急激な増加と集中化(マルサス)、国家の成長と国家の官僚制の日常生活の隅々への侵入(ウェーバ、フランクフルト学派)、急速な時間—空間の収束、あらゆる「マス masses」の形成——大観衆、大衆消費、大衆文化など(アーノルド、ヴェブレン、フランクフルト学派)の——といった諸指標によって特徴づけられる傾向。これらの諸現象の経験は、現在我々の日常生活において当たり前になっている。しかしながら、多くの重要な社会理論家を輩出した19世紀の中流上流階級にとって、これらの現象は現実的かつ直接的な問題として考えられる新しい経験であった。一例を挙げると、19世紀初頭にマンチェスターを訪れた内外の人々は絶えず、おびただしい人数の喧しい労働

者階級の群衆に注目した。これらの群衆が曜日や前夜祭で浮かれて騒ぎ、また復活祭の時にデモをし、夜に買い物をする事、さらには仕事への行き帰りにさえ関心が寄せられた。労働者が日中の間、閉じ込められる工場や作業場に入っていくと、安堵のため息がもれた(Storch, 1977)。したがって19世紀の中流階級にとってスケールの問題が、「秩序」と「管理」といった言葉と、このような急激に変化する環境のなかで社会秩序がいかんにして生じるのかあるいは可能であるのかという問題とをめぐって特に集中していると認識されたことは、驚くべきことではない。

変化した状況を把握するために、新しい実践的で理論的な範疇が案出され、古い範疇が修正される。数え上げられ、分析されるべきものとしての人口という考え、道徳地誌 moral topography の着想、政治経済学の意味論的な場の全体(「マニファクチャー」、「産業」、「工場」、「階級」、「資本」、「労働」、「産業革命」のような用語を含む)が次第に現出しはじめる(Bezanson, 1982; Briggs, 1978; Foucault, 1977; Jones and Williamson, 1979; Tribe, 1978; 1981; Williams, 1976)。特に社会の解剖という医学的なメタファーが「構造的」な説明に対する関心につながる(Ginzburg, 1979; 1980b)。

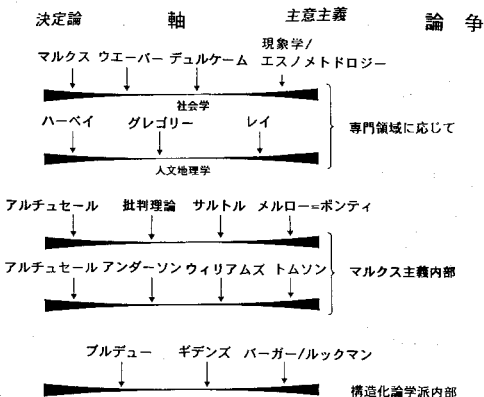
このような傾向は、それと平行して現出していた傾向によって強化された。個人という概念が、次第に決定的に変化していった——その全くの正反対のものへと。中世において「individual」は、分離できないあるいは分割できないことを意味していた(Williams, 1961; 1978; Weintraub, 1978)。「single individual」はなんの意味も持たなかったであろう。相対的に閉鎖的であり、静態的であった中世の共同体は、最小限の分業と多くの作業の共有に基づいた共同体である。このシステムは、相互行為を既知の社会的世界の構成員に限定しているため、社会的相互行為の管理に基礎づけられていた。したがって全員が顔見知りであり、特別に発達した管理と監視のシステムを必要としなかった。それは局所的 local でありえた(Giddens, 1981と比較せよ)。このシステムは、結局資本主義へとつながる相互に関連した様々な理由——分業の拡大、賃労働と計算合理性の出現、都市人口の増加など——のために、神の意志よりも人間の意志という概念に依拠し、人間が求められる自己の形式に選択権を持つという考えに基づいた強力な個性 individuality と自己—管理へと次

第に取って代られた(Weintraub, 1978)。もう一度言うが、個性と社会的管理の問題の結び付きは強いものである。個人という観念は、(教会よりもむしろ)国家への関係においてその近代的な世俗化された意味を獲得する(Foucault, 1977; Elias, 1978; 1982)。市民サービスや警察のような新しい諸制度の全体を通して、国家が徐々に「理解可能性の格子 grid of intelligibility」を形成する。日常生活が科学的な言説のなかに含まれる(Smart, 1982)⑥。個性は同一化と結びつけられる。つまりひとつの概念として個性は現在では、特定の社会集団と、時間を通じて「生涯」が記述されることで発達する属性の集合としての個人という考えに属している(Ginzburg, 1979)。個人は操作的な概念、つまり科学的な知の対象となる(Foucault, 1972)。その基本的な認識論は、再び医学的であるけれども、今度は非候 symptoms の診断に依拠している。これは記号論においてと同様に、諸記号を解釈すること、そしてフロイトへと直接的につながる。

資本主義においてこの二つの傾向は、社会化された生産と私的領有の間の大きな矛盾として現出する。資本主義社会は集合主義的であると同時に個人主義的でもある。一方で、個々人は高度に社会化された世界に生きている。他方で個々人は私的な世界に生きている(Brittan, 1977)。その位置は不安定で曖昧である。私は、この緊張が日常生活と同様に社会理論においても顕著であると提起する(Dawe, 1979)⑦。したがってこの二つの矛盾する傾向は、それぞれの方向に引きつけあいながら、19-20世紀の多くの社会理論に見い出される。特定の社会理論は様々な程度で資本主義社会の決定論へ、あるいは資本主義社会の個人の主意主義へ知らず知らずのうちに向かう傾向がある。こうして「二つ」の社会学(Dawe, 1970; 1979)、「二つ」の人類学(Sahlins, 1976)、「二つ」のマルクス主義(Albrow, 1974; Veltmeyer, 1978; Gouldner, 1980; Hall, 1980)等々が存在する。勿論こうした区別は、実際には最も高い程度に単純化している。特定の「諸個人」によって提唱された多くの社会理論とその変形は、二つの次元が混じり合わさったものであり、二極間の連続体上の点として最もよく表現される。非常に複雑な仕方ではあるが、社会科学における最近の多くの論争に対して、第1図が試みているのがこれである。第1図の軸上での特定の個人の理論的位置は、実際の場合よりも単純に見えるように作られているが、このような図を提示す

るのに必要な次元性への還元がその理由である。[確かにいくつかの場合に(特にウェーバとデュルケム)、この工夫はバスカール Bhaskar (1979, p.40 と p.46)によって作りだされ、グレゴリー Gregory (1981)によって再生産された図と同様に議論の余地が残されている]。

このことに関連した重要な点として、社会理論は合成的なものと compositional とコンテクスト的なもの contextual のいずれかに向かう傾向がある(Hägerstrand, 1974)。[シン普森 Simpson (1963)とケネディ Kennedy (1979)は内因的 immanent なアプローチと配列的 configurational なアプローチの間に類似の区別をしている]。マルクスの「構造的-発生的」な方法(Sayer, 1979; Zeleny, 1980)でその最高点に到達した合成的アプローチにおいて、人間活動は、「類似性 alikeness」という属性に基礎づけられ、抽象化という手段に基づいた形式的-論理的方法によって導きだされた、一連の幅広い構造的な諸範疇のなかに区分される。次にこれらの範疇が、社会あるいは少なくとも社会の一部の説明として再度組み合わされる。シュッツ Schutz の現象学やバーガー Berger とルックマン Luckmann の現象学的弁証法的アプローチ、ゴフマン Goffman のフレイム分析、ハレー-Harréの知識構成論 architectonic、ヘーエルストランド Hägerstrand の時間地理学にその諸要素が見い出されるコンテクスト的アプローチにおいて、人間活動はその直接的な空間的かつ時間的な場面における社会的な出来事として取り扱われる。そしてそこで導きだされた範疇は「共存性 togetherness」という属性に基づき、それはバラバラに分離されてはならない。勿論コンテクスト的な説明を構築する試みは、往々にして唯名論や一元論に終わったり、あるいは逆説的に社会構造の力をより強く示すだけであった(Abercrombie, 1980, p.170)。しかしこうした試みが失敗に終わってきたことは、その批判の条件を必ずしも変更するものではないし、その批判が力をもたないという結論には至らない。合成的アプローチとの対照において、そして多くの場合にこのアプローチへの反発において、コンテクスト的アプローチは、人間の主体的行為の流れを、空間と時間における一連の位置付けられた出来事として把握しなおそうとする試みである。今一度、合成的アプローチとコンテクスト的それとの区別はひとつの単純化である—多くの社会理論はこの二極の間の連続体のどこかに



第1図 様々な社会理論家と専門領域における決定論と主意主義
—ひとつの推定

位置付けられる——が、以下の議論にとって重要な意味を有している。

3 構造化論学派:非機能主義的社会理論へ向け

『ヴァレリーが一個のプチ・ブル・インテリであるということ、このことにはうたがいはない。しかし全てのプチ・ブル・インテリがヴァレリーであるわけではない。現在のマルクス主義の発見学としての不十分さはこの二つの言葉のうちにひそんでいる。人間とその人間の所産とを、与えられた歴史の一時期に於ける与えられた階級と社会との内部に於いて産み出す過程を把握するために、マルクス主義には段階的な媒体が欠けている。…独自で具体的なもの、人生、現実的で動かしたい日付をもった闘争、人間、を、生産力と生

産関係の一般的矛盾をもととして現出させることを可能にするような、いくつかの媒体を発見したいとねがう』(Sartre, 1960, pp.44-45)²⁸。

第2章で、部分的には資本主義へと迎えられる基本的な二元性 duality、決定論的アプローチと主意主義的アプローチとの間、そして人間の主体的行為についてのそれぞれの見方、つまり「みせかけの(plastic)人間と「自律的な」人間(Hollis, 1977)との間の二元性が近代社会理論の中心にあることを、簡潔ではあるが私は示そうとした。こうした二元性は、社会構造と人間の主体的行為を弁証法的に再結合するような方法で作り直され得るだろうか?。これが、様々な形式で「構造化」理論を支持する多くの論者の仮説である。この理論の諸要素は最初にバーガーとルックマン(1966)によって

提出されたが、今日ではギデンス(1976; 1977; 1979a; 1981)、バスカール(1979)、ブルデュー(Bourdieu (1977)¹⁰)によって提起された一層精緻な「再帰的 recursive」あるいは「変換的 transformational」モデルによって十分に展開されている。この三人によって提案された諸理論は、いくつかのはっきりとした相違をもっているけれども、私が考えるに、そのいくつかの類似によって、この論者たちを構造化論「学派」に属していると記述することがまだ十分に適切であると、強調することが重要である。

四つの共通する関心がこの論者たちをひとつにしている。第一に彼らは、(明示的にあるいは暗黙のうちに)、反機能主義者である。つまりこの論者たちは機能主義者の「説明」が単なる逃避であると認識している¹¹。ある点で、ギデンス(1979a, p. 7)は、自らの企図を『非機能主義的な社会科学が実際に何に關係するのかを提示する【こと】』(強調は著者)に、結び付けており、これはおそらく構造化論学派のモットーとして用いられるかもしれない。なぜなら他の三つの共有された関心はこの結節に結び付けられるからである。

第二の関心は、構造的(一決定論者(客観主義者)のアプローチも主意主義者(主観主義者)のそれも、ある共通の目標に加えられたとしても、この二つのアプローチを弁証法的な統合に結び付けることを満足させないという共通のメッセージである。構造的-一決定論者のアプローチは、人間の慣習行動を機械的で創造力の欠如したものとして、つまりカストリアディス(Castoriadis (1975)らが「変換性 alterity」¹²、つまり新しさ newness の本質と呼ぶものを、欠如したものとして把握するので、批判される。一方で主意主義的アプローチは、相互行為に関心を集中させることで、以下の事実が気が付かなくなるので、同様に問題を孕んでいる。

『人間間の諸関係は、外観を別にすれば、個人と個人の関係性ではない。…相互行為の実相は相互行為のなかに完全に含まれているわけではない。個人間の関係性の客観的な構造のある特定の状況あるいは集団におけるその相互行為の結合的な構造へと還元してしまう時に、社会心理学、相互作用論あるいはエスノメソドロジーが定れているのはこのことである』(Bourdieu, 1977, p. 81)。

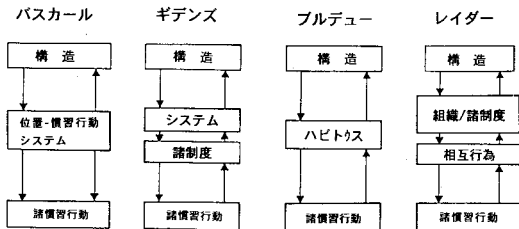
そうではなくて、諸社会構造はその双対性 duality によって特徴づけられる¹³。社会構造は人間の慣習行

動によって構成されると同時にこの構成のまさに媒介である。社会化の諸過程、現存している自然環境などを通して、諸個人は社会構造に依拠している。しかし諸個人は社会構造に依拠しながら、生産と再生産の諸条件の生産あるいは再生産を通してこの構造を再構成しなければならない。したがって個人は、ある意味で、能力と知識を備えている行為主体として、その構造を再構成あるいは変換さえする可能性を持っている。よって「変換的 transformational」モデル(Bhaskar, 1979)。それゆえに社会生活は根本的に再帰的であり(Giddens, 1979a)、構造と主体的行為の相互依存関係を表わしている。社会構造は動機づけられた(しかしながら必ずしも理由づけられているとは限らない)活動から独立して存在することはできないが、そうした活動の単なる産物でもまたない。

しかしながらはるかに重要な問題は、構造と主体的行為の間の非機能主義的結合をいかにして構築するかである。ここで構造化論学派の個々のメンバーはそのアプローチで異なっている(第2図を見よ)が、間違いなくバスカールの次の意見(1979, p. 51)に同意するだろう。

『我々は、能動的な主体が再生産するために入り込まねばならない社会構造のなかに、いわばその「隙間」を示しながら…媒介する諸概念のシステムを必要としている。つまり人間の主体的行為と社会構造の間の「接点」を示す諸概念のシステムを必要としている』。

このサルトル的な媒介概念 mediating concepts は、論者によって異なる。ブルデュー(1977)の答えは、社会構造と人間の慣習行動の間に第三の「弁証法的な」水準、つまり認知的で動機づけをおこなう(「理由を付与する reason-giving」)諸構造から構成される「ハビトゥス habitus」と呼ばれる「半構造」を導入することである。この半構造は、特定の相互行為(これらの相互行為はハビトゥスによって調整された即興的なものである)に関わる諸戦略に組み込まれた客観的な生活一機会に基礎付けられた行為者に、一定の客観的な諸条件と前もって決定された性向 dispositons を与える。こうして例えば、各階級は、共通の物質的諸条件と、ゆえに諸期待から生じるある特定のハビトゥスをもっている(Pincon, 1978; Garnham and Williams, 1980; Acciaoli, 1981)。各生産様式は、言わば、それ自身の知覚様式を有している。対照的にギデンスは既存の諸概



第2図 構造化論学派のメンバーの図式における媒介概念

念に磨きをかける。例えば構造は、いくつかの規則と資源、つまり特定の構造的な諸属性にその意味を限定される。次に「システム」という本質的に新しい概念が、再生産され、かつ規則的な社会的慣習行動として付加される。諸制度は、この社会システムの基本的な積み木となる。最後にバスカール(1979, p51)は、位置 positions-慣習行動システムというかなり一般的な概念を提案する。彼はつぎのように主張する。

『我々が求める媒介するシステムは、個人によって占められる(務められ、引き受けられ、演じられるなど)いくつかの位置(場所、機能、規則、仕事、義務、権利など)とこの位置を占めることで(逆もまた)個人が担う慣習行動(活動など)のシステムであることは明らかである』。

構造化論的立場の第三の主張は、大部分の社会理論において、(慣習行動的な)行為の理論(Giddens)、行為する主体の理論、慣習行動の理論(Bourdieu)が欠如しているというものである。[そうした理論は個人的行為の社会学理論と混同されるべきではない(展望として Lazarsfeld, 1972 を見よ)]。したがって人間の志向性と動機づけを説明できる実践的理性と意識に関する明示的な理論が必要である。この企図は三つの理由から重要である。第一に、既に指摘されているが、社会理論において人間行為と社会構造の間に直接的な結び付きはない。確かに社会形式によって保持されている属性はしばしば、社会形式がその活動に依拠している

個人によって保持されている諸属性とは非常に異なる。かくして動機づけと志向性は、人間活動の特徴づけるかもしれないが、社会構造や社会構造における変換を特徴づけるわけではない。第二に庶民がその社会的状況とそれを変える方法を考察することに、全ての時間を費やさないと明白である。たしかに人々の思考の多くは、精神のなかで決まった目的を持たない既に割り当てられている作業を実際に行うことに向かっている。そして第三にひとりの女優がある演技をもっともらしく説明する時に、それが彼女がその演技をおこなっている本当の理由に必ずなるだろうと信じるいかなる理由もないことである(Wright Mills, 1959)。かくして

『…人々はその意識的な活動において、大部分は無意識のうち、生産に関する人々の実質的な諸活動を管理している諸構造を再生産している(場合によっては変換している)。こうして人々は核家族を再生産するために働くのでもないし、資本主義経済を維持するために結婚するのでもない。にもかかわらず、それは人々の活動の意図せざる結果(そして仮借ない結果)であり、またその活動にとって必要条件でもある。さらに社会形態が変化する時に、その変化の説明は通常、その方向に社会構造を変化させる主体的な行為者の欲望のなかに見出せないだろう。非常に重要な理論的かつ政治的な限界として、それはそのように変化するかもしれないけれども』(Bhaskar, 1979, p.44)。

したがって慣習行動的な意識および理由と自省的

(あるいは言説的)なそれを区別することが重要である。慣習行動的な活動は自省的に理論化されない。慣習行動的な意識は、『一連の振舞を行なう際に巧みに用いられるが、行為者が言説的には定式化できない暗黙知 tacit knowledge』(Giddens, 1979a, p.57)である。ある行為者がある行為に付与する理由が、必ずしも本当の理由であるとは限らない——実際の理由は行為者の理解の外側で作用しているかもしれない。行為者が付与する理由は、「理由の付与」の一部であり、これは勿論本当の理由に関係するにちがいないが、あるいは正反対に反転させられるか屈折させられる場合さえもあろう(10)。

構造化論者の第四の主張は、第三のそれと必然的に関連しているが、時間と空間があらゆる社会的相互行為の構成、ゆえに社会理論の構成にとって中心にあるということである。これは社会理論が歴史的かつ地理的に特殊でなければならぬことを意味しているのではない。より重要なことは、社会理論がまさにその最初から、社会構造の時間—空間構成についてでなければならぬということである。よってギデンス(1979, p.54)にとって、『社会理論は、これまで全く承認されてこなかったが、時間—空間の交わることを社会的存在すべてに本質的に関係したもとして承認しなければならない』。このような視点は多くの重要な帰結をもたらす。例えば、社会構造は空間的かつ時間的な構造から切り離されない。この二つの構造は、一方が他方に与える影響としてではなく、接続されて理論化されねばならない(Giddens 1981; Gregory 1982 を見よ)。さらに人間の主体的行為は、社会構造に絶えず問い掛ける時間と空間における振舞の持続的な流れとしてみなされねばならない。人間の主体的行為に関するこうした見方は必然的にコンテクスト的である。ブルデュー(1977, p.9)はそれを次のように説明する。：『慣習行動は、その時間的構造、方向、リズムがその意味を構成しているという事実によって定義される』。人間の行為が、持続的な時間(そして空間)—収支過程として、かつ諸行為の不可逆的な継起として、時間のなかで生じることが要点である。部分的に慣習行動の継起にすぎないある時間を備えている社会理論が、このことを忘れがちであることは間違いない。にもかかわらず、慣習行動、慣習行動的な意識、慣習行動的な意味の重要な一部であるのは、特定の諸行動を実行するために、人々の慣習行動が時間を限られている(諸行動

をする決断を行なうための限られた時間)という事実によって、その慣習行動に課せられるその場かぎりの即興的な戦略である。したがって慣習行動は常に時間と空間のなかに位置付けられている。活動が位置づけられる場所は、それ自体で構造を反映している諸制度——家、労働、学校など——の結果であるので、構造化論者にとって、このことは構造へのひとつのつながりである。こうした諸制度は、人間活動がその周囲に集中する結節を時間と空間のなかに形成する。ギデンス(1979a)が指摘するように、これは地理学者が「時間—地理学」の研究を通して、過去 10 年余り特に没頭してきた分野である(Hägerstrand, 1970; 1973; Thrift, 1977; Thrift and Pred, 1981)。

さて以上が、構造化論学派の四つの共通する要素である。次の章で、私はこれらの要素が非機能主義的マルクス主義への展開に重要な意味を与えると主張するつもりである。しかしながらこの主張を正当化するためには、私がマルクスの仕事の核心にながらんと受け取っているのか、そして基本的には私が「史的唯物論」をどのように考えるかを、この接続において理解することを重要である。私にとって、マルクスの仕事は三重の重要性を持っている。第一に、人間の全社会構造の中核に「物質的生活それ自体の生産」があるという単純な超歴史的事実が承認されている。第二に、抽象化の次の段階で、社会構造は特定の時間と空間を特徴付ける特定の生産組織をめぐる編制される。「史的唯物論」の目的のひとつは、これらの組織の基礎にある「機構 mechanisms」(11)を明らかにすることである。第三に「史的唯物論」は、抽象化の異なった諸水準から、諸決定に付随して生じる結果として、「思考における具体的なもの」(条件に依存することが避けられない経験的なものではない)を再構築しようと試みる。これらの諸決定が一緒に位置付けられる時、動態的あるいは過程的な範疇の階層的な集合を形成する(Sayer, 1979; 1981; Zeleny, 1980 を比較せよ)。私はマルクスの仕事のほかの一時的に重要な特徴が、時代と場所に一層固有なものであると考える。ギデンス(1979a; 1981)が注意するように、こうした特徴のいくつかは 19 世紀思想の余分な邪魔物として考えられねばならない。したがってこの特徴は一時的なものである。この特徴は機能主義、進化主義、本質主義を含んでいる(Keat and Urry, 1982 を見よ)。だがその他の特徴は、マルクスがそれを考えていたレベルとは異なっ

た歴史的種別性の水準で現在は存在しているように考えられる。したがって最近の研究を考慮に入ると、全体的な超歴史的言明——『これまでの全ての社会の歴史は階級闘争の歴史である』——は、抽象化の歴史的に一層種別的な生産様式の水準でより適切に考察される(Giddens, 1981と比較せよ)。

4 構造化論学派がマルクス主義社会理論に対してもつ意味

『先駆者をさらに先へ進めるよりも、先駆者に反対することのほうが簡単である』(Lefebvre, 1976, p.57)。

非機能主義的マルクス主義を形成するために、構造化論学派の洞察をマルクス主義と相互浸透させることは、容易な仕事ではないだろう。問題はギデンス(1981, p.16)によって適切に指摘されている。

『機能主義から分れる際に、…我々は以下の両方を認識できる必要がある。つまり「知ることができること knowledgeability」という原理——我々は、自らがおこなうことに対して理由を持った、目的的で知ることができる者である——と呼ばれるだろうことと同時に、社会的諸過程が我々が気が付かない仕方で行うことに影響を及ぼしながら、「我々の背後」で働いていること、をである。マルクスは有名な警句のなかでこの問題を次のように要約していた。「人間は歴史を作る。しかし自らが選んだ環境のもとではない」。しかしながらこの反論できない言明の意味を解明することは難しい。

確実であると思われるのは、構造化論者のアプローチがマルクス主義の線上に簡単に位置付けられないということである(Weiner, 1981を見よ)¹⁵⁾。このアプローチの意味は、これをはるかに超えており、マルクス主義の徹底的な再考を要請する。しかしそのアプローチは少なくとも、それを不可能にするほどマルクスのいくつかの解釈からかけ離れているわけではない。例えば、社会構造が人間の主体的行為によって構成されるとともに、この行為の媒介でもあるという構造化論的アプローチの第二の要素は、マルクスによる社会モデルと矛盾しないものとして解釈可能である。バスカール(1979)は賛意を示しながらマルクス(Mark and Engels, 1965, p.65 から)を引用する。つまり

『歴史とは、それぞればらばらの世代の継起にほかならな

い。それぞれの世代は、以前の全ての階級によって手渡される物質、資本元本、生産諸力を搾取し、一方で全く変ってしまった環境のもとで伝統的な活動を維持し、他方で全く変ってしまった活動によって古い環境を修正する』。

しかしながら、以上のことはその結構が簡単であろうということを示唆していない。とりわけ構造化論学派のメンバーの著作は、多くの失敗に苦しんでいる。第一に、彼らは決定という明確な概念を提示していない。マルクス主義は多くの点で批判されるが、少なくともそれが関心を集中してきた生産諸力と生産諸関係は、決定という強力な概念と体系をマルクス主義に与えている。構造化論学派は、生産諸力と生産諸関係の力を認めているけれども(特に Giddens, 1981を見よ)、構造化論の体系で用いられる決定の複雑さは明らかに大きい(Gregory, 1982)。勿論、部分的にこれは別のことに関心を集中している結果である。例えば、個人的主観性の構成と再生産(バスカール)、文化資本(ブルデュー)、あるいは授権的資源(ギデンス)。しかしながら部分的には、経済決定論の相対的な重要性についての解決されていない曖昧さの結果でもあり、これによって、構造化論者のモデルが時には、その意図よりもはるかに個人主義者かつ主意主義者にみえるようになるからである(この誤解に基づいた批判に対しては、Clegg, 1979 と Layder, 1981を見よ)。第二に、構造化論学派の著作において、コンフリクトが、非常に公理的かつ一般的な仕方でのみ扱われていることである。第三に、第二点と密接に関係するが、例えばギデンスは歴史が社会科学から切り離せないと主張するけれども、歴史についての彼の観念はいまだに体系的であり一般的である。構造化論学派が歴史を用いる場合に、コンテクスト的であるよりもかなり合成的なままであり¹⁶⁾、これは重要な意味をもつ。アンダーソン Anderson (1980, p.21-22)のトムソンに関する判断は、構造化論者に対しても妥当する：

『問題への公理的なアプローチと対峙する、歴史的なアプローチは、ここ2世紀の間、大衆一参加と目的の規模に関して、以前の低い水準から、急激に上昇する(意図的な活動の曲線を描くように務めてきた。しかしながら、計画された主体的行為のいかなる形式の外側にも残っている存在の膨大な範疇があることを思い起すことが必要である。…自己一決定の範囲は過去百五十年間にわたり拡大されてきている。しかしその反対であるものもいまだに少なくない。結局、史的唯物論の絶体的な目的は、まさに歴史上はじめて

『真に民衆的な自己決定を行行使するための手段を人々に与えることである』。

史的唯物論の要点は、意識的で規制された自省的な人間の主体的行為が社会構造になることを可能にすることである。それゆえに客観的かつ合理的な様式で人間の主体的行為の限界を確定する結果、社会構造が再構成されるかもしれないというマルクスの仕事の全体的な要点が、行為者がそのもて勤かねばならないあるいはならなかった支配的な諸条件の現実主義的な評価である(少なくとも評価の試みである)にもかかわらず、構造化論学派によって時に決定論的と考えられることは皮肉である。

以上の留保にもかかわらず、マルクス主義と構造化論学派の相互浸透から生じる利点は多い。確かに現在マルクス主義を取り囲んでいる諸問題に対して、マルクスのなかに発見される包括的な万能薬は存在しない(Giddens, 1979b)。最も明らかのように、機能主義の問題は解決されねばならない。このことは、マルクス主義の専門分野の付属物ではなく、マルクス主義理論の修正版に統合される多くの新しい研究分野へむけて、マルクス主義の方向性にひとつの変化を要請するだろう。

4.1 労働力の再生産

ほとんど全ての新しい研究分野は、プラクティスの領野、つまりアーリー-Urry (1981a, p.39)が「市民社会(civil society)」と呼ぶ個々の主体の構成と再生産の領野内部における労働力の再生産を適切に説明するという問題にまとめられることがわかる。

問題は、他の全ての商品とは異なり、労働力が利潤のために資本家によって生産されないことである。労働力は市民社会の圏域で生産、再生産される。他の全ての商品が資本制の生産のなかで生産されるのに対して、労働力は資本主義的生産諸関係の外部の、他の場所で生産される。

『資本論』において、労働力は活動的で生き生きとした状態で生産の活動圏に入る場合にかぎり、問題として取り上げられる。この労働力の再生産と意識的主体として労働力の構成は、マルクスが扱ったとしても、稀にしか取り上げなかった事柄である。労働者や資本家のような具体的個人は、経済的範疇の「擬人化 personifications」やあるいは「機能分担者 functionaries」であるがぎりで記述される(Molina,

1979; Urry, 1981a)。つまり他の諸決定によって区別されていない男性と女性という経済的存在の審級として。勿論アンダーソン(1980)のごとく、日常生活の様々な歴史的形態や人間の個性の形成のような、労働力の再生産が重要であると認められる時に取り込まれられねばならない主題は、倫理学の理論さらには生物学や物理学のような自然科学における主題がそうであったように、マルクスの実質的な関心分野の外にあったと主張できる。マルクスが生きた時代と場所に関して、アンダーソン(1980)の主張がそうであるように、マルクスの主要な関心が経済学であり、彼に利用できた唯一の武器がフランス社会思想、ドイツ観念論の哲学、イギリス政治経済学であったことは、驚きではない。社会学、心理学や他の近代的な知の分野は、利用されるべく存在していなかっただけである。確かにこの主張は実質的には正しいが、そうした関心をいま考慮することは、マルクスの社会理論を修正する必要性を免除しないし、またその仕事の緊急性を緩和させもしない。

勿論マルクス主義者のなかには、個人を把握する全ての努力を、いささか救いようもないヒューマニストとして考える人もいる。しかしながら、マルクス主義者の文献のなかにごうした結論につながるものはない。実際、マルクス主義のなかで最も反ヒューマニストであるアルチュセールの仕事においてさえそうである。モリナ Molina(1979, p.239)が指摘するように、マルクスは、

『擬人化されたもの(経済的範疇の担い手として)として個人を理論的に取り扱うことと、個人(経済的関係それ自体から生じない個人的な差異による)として個人を取り扱うことの間の明確な区別をはっきりと定式化している。問題とその答は、何がマルクス理論における「個人」の範疇的地位の問題であるのかと、何が個性それ自体の問題であるのかとの間の差異に明確に対応しており、後者の問題はマルクスのなかにはない』。

よって個人と個性の問題はマルクスにおいて閉ざされていない。むしろ個人は経済諸関係から生じるものを除いて、全ての決定を失ったようにみえる。しかしながら、他のより偶発的 contingent な諸決定の集まりが、この骨格に肉付けされる。マルクスは、個性の存在に関する様々な歴史的諸法則とこの個性を最も基本的に決定するものを概念化する問題の双方を考えるための理論的な諸原理を提供している。他のマルクス主

義者は、我々が正確に注意してきたように、日常生活や個性の形成といった諸問題を、いまだにマルクス主義の實質的部分の外側にあるものとみており、さらに最近の状況からそうした主題は永遠に範囲外にあるにちがいないという結論に達すると推論している。しかしながらこうした立場を正当化する証拠はほとんどない。特に三つの反論がある。第一に、マルクス主義理論の帰結のひとつ(はっきり言うとも目標のひとつ)は、『マルクス主義者の理論的実践がいまだに実現していない領域の(持続的)な変換』(Althusser, 1969, p.169)にある。この変換は確実に続いているだろう。第二に、そうした近視眼的な見方を保持することは、マルクス主義の理論的領域において資本主義を再生産するだけであると主張されるであろう。なぜなら、勿論、資本主義の最も重要な特徴のひとつは、その諸要素や諸要素間の種別性や個性性に対する無関心であるから¹⁰⁾。第三に、マルクス主義が社会的慣習行動について知るべき重要なことを全て既に含んでいると仮定しないかぎり、マルクス主義は新しい素材との接触によって進歩することができる。マルクスの理論におけるある空隙が充填され、マルクス主義がそうした接触によって発展させられると同時に、接触したものを発展させる可能性は確実にあるにちがいない。したがって労働力の再生産は、特にマルクス主義の相互に密接に関連する三つの研究分野つまり階級的コンフリクト、イデオロギーとヘゲモニー、人格(personality)、を特徴づけ具体化する、きわめて重要である。

人間の労働力は他の商品とは異なる。労働力は創造的力能を有するので、拡大資本と利潤の源である。しかしながら労働力は同時に抵抗の源でもある。そのような労働力は自覚した意志を持ち、主体的な行為を備えている(Willis, 1977)。YeoとYeo(1982, p.147)が指摘する。

『労働力を売るという所為は、いつでも同じ意味においては、その行為はおこなわれる。労働力は実際に何から構成されているのか? それは同一の単位で測定を可能にする(通約化) (commensuration) という目的のためだけの抽象である。労働力は売り手と買い手によってどのように認識されまた評価されるのか? それ以外の生活との関連で、労働力の意味は何であるのか? 売ることの返りとして何が獲得され、否定され、目論まれているのか? こうした疑問のすべては、歴史的かつ物質的であり、抽象的かつ超越的ではない。そして労働と余暇の間の

不変的であるが、いまだにさほど階層的ではない関係性というひとつの理論化された見方によっては答えられない。賃金関係は経済的關係以上である。物を生産することは諸関係を含む。つまりこの諸関係は、資本家を含む多くの側面のなかで存在する人々全体の間で、社会的である』。

賃金労働、その売り買い、その存在、これはコンフリクトの主題である。階級的コンフリクトは、マルクス主義者 Marxian の枠組のなかで中心的な位置を占めることが意味される。にもかかわらず、マルクスとそれに続くマルクス主義者 Marxist の分析においてもしばしば、階級的コンフリクトは資本と労働の間にはさまれた階層的で機能的な位置を占めており、中心的な力動としてよりも、二つの対立するブロック間の摩擦係数のように作用する位置にある。「封建制から資本主義への移行論争」におけるブレンナー/ドップ Brenner/Dobb の立場に対するトライブ Tribe (1981, p.32)の批判は他の場合にも妥当する：

『しかしながらズレは政治という呪文を通じて一時的に閉じられてしまう。『階級闘争は歴史の原動力である』というマルクス主義者の教えは、封建制の荷車のシャフトの間に差し込まれ、封建制という不動の経済秩序を周期的な弁証法的介入によって、資本主義に引きずり込むように助長する。しかしよく調べてみると、この「政治」は、それが既に占めている空間上に経済的諸関係が放射されたことによって構成されていることがわかる。つまり政治は経済的秩序の矛盾的な進展を説明するために利用されるが、政治それ自体はこの経済的秩序の表出にすぎない。こうした困難にもかかわらず、「政治」はその仕事をおこなう。つまり封建制と資本主義の間のズレが閉ざされ、秩序立った起源が再確立される』。

マルクス主義が「政治」の適切な理論をもっていないこと、また諸慣習行動の領野において階級の構造化過程(Giddens, 1973)がいかんにして生じるのか [つまり市民社会内部での諸社会階級の形成(Urry, 1981a)]、あるいはトムスン(1963)とフォスター Foster(1974)の説明にもかかわらず、階級的自覚と階級意識がいかんして構成されるのか、に関していまだにほとんど見解がないこと、は不思議ではない。類似的諸問題が、支配的な秩序が特に労働の外でいかんして維持されるのかについてマルクス主義者の考えを悩ませている。勿論イデオロギーやヘゲモニーという範疇は明らかに機能主義的な用法の影響を受けてきた(Abercrombie et al, 1980 を見よ)。さらにこうした範疇はしばしば、市

民社会における慣習行動の多様性を把握するために用いているのが困難なほど一般的かつ抽象的な様式で使用されている(Urry, 1981a)を見よ)。最後にマルクス主義には、具体的な人間の人格について適切に展開された理論がない。まさに現在構成されているかぎり、それを待ちえていない。

日常生活と個性の形成に重点を置くことで、以上の三つの分析分野のそれぞれまたその全てを充填することは、マルクス主義理論にコンテクスト的な次元の発展を要求するものであり、この次元は構造化論者の著作の主たる要素、つまり構造と主体的行為、慣習行動的な理性、時間と空間の交わる場所の間の非機能主義的結合の重要性に立脚することによってのみ構築されよう。階級的コンフリクト、イデオロギーとヘゲモニー、人格の形成といった主題の探究は、全ての単に理論的な一般性のひとつの尺度のみならず、経験的对象と同時に理論的对象として種別性を把握しようとする理論も要求する。例えば、ある人々が、ある時代に、ある場所で、あることをおこなうのはなぜか、一方で他の人々が、他のあるいは同じ時代に、他の場所でおこなわないのはなぜか、あるいは異なった抵抗の形式と組織のパターンがなぜ、見かけのうえで類似の諸条件のもとで起きるのか(Bleitrach and Chneu, 1979; Grob, 1979; Lofkine, 1981)、は特定のコンテクスト、特定の場所に全く固有である。つまりコンテクスト的な科学、細部の社会学、あるいは他の人々は、「社会心理学」(Bhaskar, 1979)、「特異なもの(the singular)の科学」(Sève, 1975)「特殊なもの(the specific)の科学」(Layder, 1981)と呼んでいるが、それらを発展させる必要があり、諸決定はある特定の場 locality で特定の諸個人と特定の諸個人の諸集団に生じるので、この科学のなかでこの決定を描くことが可能になる。

4.2 いくつかの問題

したがって我々は、『相互行為を構造の排他的かつ機械的な諸効果に還元せず、また構造を行為者の達成やその諸相互行為の結果に還元しない』(Layder, 1981, p.94)非機能主義的理論をいかにして獲得するか。換言すると、我々は合成的なものからコンテクスト的なものへ、いかにして移行するか。確かに社会構造と人間の主体的行為の間を移動する問題は、容易には解決されない。例えば、ホブズボーム Hobsbawm (1980, p.7)のようなマルクス主義者は、社会史において明らかに

より小スケールへと分析が移っていることを議論するなかで次のように主張する：

『望遠鏡よりも顕微鏡のなかで労働を観察するという選択は、なんら新しいものはない。我々が同一の宇宙を研究していると認める限り、小宇宙と大宇宙の選択は適切な技術を選択することの問題である』。

実際には、マルクス主義の観点から理論的に洗練された方法で、日常生活で起っている階級的コンフリクト、ヘゲモニーとイデオロギー、人格形成といった主題を研究することに解決困難な問題がある。最も直接的な困難から二つだけを指摘しよう。

(a)階級形成、階級的自覚、階級意識の過程において、参加者たちは、しばしばある特定の地区での自分たち自身の集合的な生活のなかで触れる具体的な出来事や経験だけを覚悟する。こうした出来事や経験が参加者の行為に与える影響を評価することは、難解な作業である。

(b)生活の様々な「部分」間の生きられた相互関係性が、この過程にとってきわめて重要であるが、この関係性はほとんど常に、「家族」、「工場」、「性行動(sexuality)」、「住宅」などのように、断片化された方法で研究される。フォスター カーター(1978, p.75)が述べるように、最近のマルクス主義の分析は時に、「狭く限定された諸問題がその相互の意味を考えられることなく、ばらばらに議論されているので、お互いますます結び付きを失った小さな岩石の塊」に似ているようにみえる。個人的行為の一般性が失われている。したがってその理論的な前提も失われている。

レイダー Layder(1981)は合成的なものとのコンテクスト的なものを非機能主義的に結合するひとつの大変興味深い手段を提供している。彼はまず最初に、客観的な社会構造を指摘する。この客観的な社会構造は、二つの主要な構造の型、つまり形式的構造と実質的構造から構成される(p.106の第2図を見よ)。形式的構造は抽象化の高次のレベルで存在し、行為に広範な影響を及ぼす。この構造は、階級、資本蓄積の諸傾向などのような諸範疇の過程から構成される。実質的構造は、相互行為の現実の場、つまり諸制度のレベルに関連する。最後に重要なことであるが、現実の人間の相互行為が起る相互行為の構造(第2図)がある。構造の各型は相対的に自律しており、相互に必然的な結び付きは存在しない。むしろこの結び付きは歴史的に偶有的

である。

重要な点は、主体的行為者が最初に相互行為の構造を生産することである。この構造は固有の状況であり、「重層決定 overdetermined」される。つまりいくつかの活動は、(社会構造について)変換的ではなく、(相互行為の構造について)単に再生産的であるにすぎず、分析視点から重要ではなくなりうる。社会構造の再生産あるいは変換が、人間の相互行為の特定の事例に左右されることは非常に稀である。それゆえに、相互行為の構造という概念は、人間行動が、存在の諸条件を構成する客観的な社会構造(あるいは諸構造)の単なる一機能では決してないという事実を示している。その結び付きは直接的になりうるが、しかし向様に曖昧になりあるいは存在しないこと nonexistence さえありうる。課題は、その結び付きがどのようなものであるか、そしてその重要性の程度を明らかにすることである。

5 空間と時間における社会的行為の非機能主義的理論: 研究課題

『ひとりの人間が自らの人生を作ること、そしてその人生がひとりの人間を作ること、それが私の理解したいことである』(Sève, 1975)。

この最終章で私は、歴史的に固有ではあるが、断片化されていない人間行為のコンテクスト的理論がどのようなものであるか、それは同時に人間の行為に関する合成的理論へのコミュニケーションの明確な方向性をもっているか、をいくつかの構成要素で素描してみたい。私は、この概略を構造化論者の四つの関心に還元するのではなく、その関心をこの概略のなかに紐込むことができたかと望んでいる。したがってこの素描は、例えば、時間と空間における慣習行動な理性と行為および具体的な相互行為の不可欠な重要性を強調する。

この状況で次に求められることは、必然的に、計画的であり概要にとどまっている。そしてほとんど新しいことはない。この概略の大部分は、とくに社会史、歴史社会学、歴史人類学、そして今日の人文地理学と地域社会学において、多くの研究者によって既に埋められつつある。ここで私の目的は二つのことを強調することにある。第一に多くの研究分野で研究者の関心に本質的な一致があること、第二に社会理論におい

て必要な契機としての経験的探究の著しい重要性。従ってこの方向に沿って、私は、これらの多岐にわたる関心の焦点としてのみならず、社会的行為論の主題かつ対象として、再構築された地域地理学 reconstructed regional geography(伝統的な地域地理学の強み、例えばコンテクストに対する感受性、のうえに立脚したひとつの地域地理学で、しかし理論的かつ解放的な目的を指向する)(Baker, 1979; Gregory, 1981)にひとつの場所があることを示したいと思う。「地域」(私は以下でこの用語についてさらに詳しく述べる)は、この概念構成において、社会構造と主体的行為が「能動的受動 actively passive」(私はこの用語をサルトルから借用している)に出会う場所として考えられ、この場所は、実質的に構造の生成者とその管理者に十分なることができるが、しかし人間の「創造主のような諸側面」(Heiler, 1982, p.21)が失われぬことも十分に保証する。

しかしながら最初に、この説明の区分された性質に注意することが重要である。これはあるレベルでは、失敗を認めることである。いかなる地域でも社会的活動は、連続的な言説 discourse として生じるが、この言説は、機会と制約、現前と不在の弁証法的に結び付けられた配置において、その相互から絶えず生じる膨大に共有された物質的諸状況に極差している。ひとつの地域は、そこにおいてではなく、それを通して生きられている。「言説」という用語には、この側面は重要であるけれども、人間の諸共同体が言語という媒介を通して社会的に存在しているという事実以上のかを表現することが意図されている(Pred, 1981b)。それゆえに静寂だが騒々しいコンテクスト的な場としてのヘゲモニーという、グラムシによって用いられた意味とは異なるウィリアムズ Williams (1977, p.110)の概念のなかでは、潜在的な物質的慣習行動の生きられた世界というより広い意味を伝達することも意図されている。

『生活全体を覆っている慣習行動と期待の幅広い集合体。我々のエネルギーの感覚とその付与(割当)、我々自身と世界に関して我々が形成しつつある知覚。それは——構成的でありかつ構成する——意味の生きられたシステムであり、この意味は慣習行動として経験されるので、このシステムと慣習行動は相互的に確定するように思われる。こうしてこのシステムが、社会における大部分の人々にとっての現実感覚を編制するが、社会の大部分のメンバーがその生活の多くの範疇でこの経験された現実を超出することが困難

であるので、絶対的なものの感覚を編制する。つまり最も強い意味でそれはひとつの文化であるが、それ故に特定の階級の生きられた支配と従属として考えられるべき文化である』。

さらに「言説」は能動的範疇としてみなされねばならない。ある地域の文化あるいは諸文化の居住者たちは、階級あるいは他のいかなる社会諸関係の単なる受動的な受け手として、社会化が条件付けをおこなうにすぎない文化的な操り人形としてみなされてはならない。これは、全ての社会的管理の説明を基礎付ける機能主義の民に陥ることになるだろう(Stedman Jones, 1978; Peet, 1982; Yeo and Yeo, 1982)。むしろそれぞれの文化は、既存の秩序を洞察する(penetrate)能力と諸限界をもっており、洞察の能力とその限界はしばしば相互に結び付けられている(Williams, 1977)。例えば、ウィリス Willis (1978, p.6)は、結局は資本主義の特質である商品でさえ盲目的な消費以外の使用法をもっていることを示している。

『全ての商品形態は、その消費様式に対して強力な意味を付与するけれども、決してそれを強制しない。商品は、何かを深く表現するために、しがたつてその産物である感覚を多少とも変化させるために、コンテクストから取りだされ、特定の方法でその内容を明確にされ、展開され、再所有される。こうしたこと全てが、まさに支配階級の鼻前で、そしてその生産物によって起こり得るのである。我々は次のようにさえいえるかもしれない。ある種の創造的な文化発展の特徴は、支配的社会が見捨ててきた、また「商売 business」として生産してきた、あるいは文化的意味として展開されないままであった世俗的な事物のなかに美点、可能性、潜在力を開拓することにある』。

再構築された地域地理学も、従来通りに「地域の舞台 the regional setting」という合成的な説明で始められることは間違いない。この説明はまず第一に、地誌という一般的な表題のもとに集めることができる全ての地理的決定を含んでいる；地質、水文、気候的諸条件などは長年にわたる社会の影響によって既に変化を被っている。次にある地域における生産組織の説明、生産諸力のレベルと生産諸関係の形態を確定し、労働過程に集中することが必要とされる(Dunford, 1981) (6)。このように生産を強調することは、特に資本主義下である地域の階級構造の大枠と階級形成の歴史につながるが、こうした諸テーマは他の分割によって横断

されることを余儀なくされる。例えば、支配的な性的分業はもちろん、エスニックや人種、宗教的な分割。最後に国家の地方形態が説明されねばならない。こうした合成的分析の中で、ひとつあるいは全ての分割の境界線に沿って、非常に劇的な相互行為の可能性が既に記述されている。例えばウィルソン Wilson (1980, p.68)は、コルシカにおいて、争いと血の復讐の制度が非常に複雑な社会経済的システムのなかに、いかに暗黙のうちに含まれていたのかを示している。このシステムは、

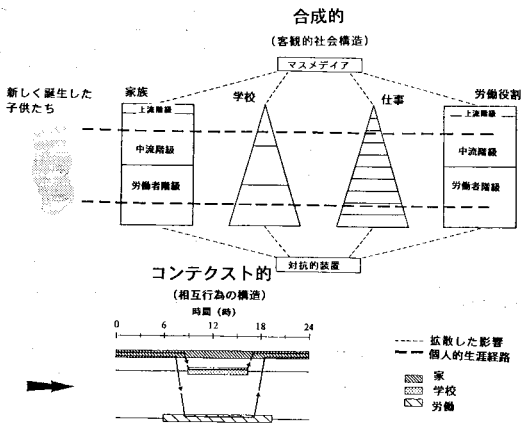
『人口の中心から離れるにしたがって土地上に広がる園芸と移動式穀類と並ぶ移牧、私有財産と並ぶ共同的土地利用、共同収穫と賃金労働と並ぶ二種類の土地における家族単位の労働、基本的な仕事を行うために家族内、家族間の相互扶助に依存すること、を含んでいる』。

ある地域の合成的な説明が、理論的にも経験的にもそれ自体で十分に困難な仕事であることは明らかである。おそらく多くの分析がこの地点に止まっていることがその理由である。しかしここでの関心は、社会的行為についての従来の(合成的な)理論的説明と相互浸透し、究極的には従来の説明を変化させ得る社会的行為の(コンテクスト的)理論を展開することにあるので、次の段階へ進む必要がある。人間の主体的行為がそこにおいて生産され、紡ぎだされる言説の過程は、合成的な説明へ還元されてしまうかぎり、ある言説をそれたらしめているまさにその性質、つまり相互行為の複雑さ、特定の時間と空間の固有性、出会いとしての生活感覚、コンテクスト、を捨てることになる。

5.1 ロカール(The locale)

ある地域を相互行為の構造として構成することは、社会構造と制度的な相関関係によって媒介された相互行為の概念を必要とする。地域は、最初は少なくとも、ひとつの場所として考えられてはいけない。それは研究にとってひとつの題材である。むしろ地域は、別々ではあるが結び付けられた相互行為のための舞台から構成されていると考えられねばならない。ギデンズ (1979a; 1981)はこの意味を伝えるためにロカールという単語を用いる。これは有効な用語であり、私はここでこの言葉を採用するつもりである。

いかなる地域も、行為に対して機会と制約を与える。つまり世界に関して知られていることの基礎であり、



第3図 合成的な秩序づけとコンテクスト的な場としてみられた生涯経路
(Therborn, 1980, page 87から加筆)

世界について何かを行なう(あるいは行なわない)ための素材である。どの地域でも特定の諸個人の生涯経路 life paths は相互作用が可能であるが、その理由は単に生涯経路が時間と空間において相互に近接して並立しているからである。しかしながら諸個人が相互作用するかどうかは、生産(それに関連した消費)の特定のパターンに左右され、逆に生産のパターンは、景観を特徴づけるローカルの特定のパターンに結果する(それから生じる)。それぞれの生涯経路は、実際にはこれらの別々のローカル間の時間配分である。特定の生産組織において、これらのローカルのいくつかが支配的になるだろう。つまり時間はその支配的なローカルに配分されねばならない。このローカルは経済的(国家的)な命令である。資本主義下では例えば、家(再生産)、労働(生産)、あと学校(再生産)が支配的になる(他の生

産様式のもとでは、他の結節が支配的になるだろう。例えばパリにおいて、宗教が労働よりも多くの時間を占める)。こうした支配的なローカルは、ある地域の相互行為の構造と客観的な構造との間に最も直接的なつながりを与えるが、それはこのローカルが階級の生産と再生産の主要な場であるという理由からである。このようなローカルは、五つの主要な効果を有している。第一に、このローカルは空間と時間のなかで人々の生涯経路を構造づける。ローカルは、ある個人の生涯経路がそれを進んで行かねばならない主要な結節を与えており、またこのローカルが階級的に構造づけられ、かつ/あるいは階級的に分化されているので、階級に固有な仕方で行なう人々の生涯経路を構造づけることになる(第3図)。セルボーン(1980, p. 23)は次のように述べている。

『「世界内」に存在することは、内包的 inclusive (意味を帯びた世界の構成員であること)かつ位置的 positional(他の構成員との関連で世界のなかに特定の場所をもっていること。あるいは特定のジェンダー、年齢、職業、エスニシティなどをもっていること)である』。

第二に、この諸制度は、この制度のなかで活動に携わる他の人々と相互行為するための個人の能力に制約を負荷することによって、他の人々の生涯経路に影響をあたえる。第三に、諸制度は他の人々との相互行為が生じる主要な範疇を提供する。したがってそこは、階級コンフリクトや他のコンフリクトの場であり、大部分の慣習行動的な理性と自省的理性の媒介と源泉であり、一般的には世界に関する知識—経験が集められ、共通意識が生じる主要なコンテキストである。第四に、諸制度は、多くの人々の生活の大部分を特徴付ける日々のルーティンの構造を活動に与える [ルーティンがひとつひとつの行動を自然なものにするのみならず無私的にさみみせるようにするので、「第二の秩序」あるいは「正式なものにする officializing」戦略としてのルーティンの重要性(Bourdieu, 1977)は、評価されすぎることではない。]。第五に、諸制度は、生まれてから死ぬまで起こる(能動的な意味での)社会化 socialization の過程の主要な場であり、この過程のなかで集合的な行動様式が絶えず遂行、再遂行されており規則が学習されまた創造される(Ricouer, 1981)。主要なロカールの各形式の内部における時間と空間の特定の内的な諸組織を考へることも重要である [ギデンズ(1981)が「区域分化 regionalization」と呼ぶもの]。つまり個々の家、仕事場などを特徴づけるルーティンと知識—経験の集積による各ロカールの内容とを観察することが重要である。例えば仕事場における特定の労働過程の空間的かつ時間的な組織、そしてこの組織が産業ごとにいかに異なるかが、重要になるだろう (Bleitrach and Chenu, 1979; 1981 を比較せよ)。

勿論、ある生産組織内部で、時には重要になり時には重要でなくなる相互に関連づけられた制度的なロカール(特に消費活動がおこなわれるロカール)の位置やその内的組織を考察することが、この支配的なロカールに付け加えられねばならない。これらの諸制度がその存在と重要性に関して支配的なロカールに従属しているということは、この制度を軽視することではなく、決定について特定の歴史的な形式にこの制度を位置づ

けるにすぎない。例えば、資本主義のもとで、「余暇」(とくに資本家の用語)への時間配分は、まず第一に労働時間によって決定される。したがって 19 世紀初頭の英国の工業地域の多くで、バブが家庭外での唯一の重要な余暇の制度になった。なぜなら労働時間(収入と結び付けられて)が、他のどんな選択肢も問題のあるものにしてきたからである。最後に、支配的な正統性へ挑戦する対抗制度を考察することが重要である (Therborn, 1980)。そうした対抗制度はしばしば、労働と学校といった制度のように他の場と一致する傾向がある。そして対抗制度は大抵そうした場に対する反発のなかで成長する。その重要性(とくに人間の主体的行為の焦点として)は、歴史と位置に応じて異なっている。その多様性の理由は以下で説明される。

こうした制度的なロカールは人々の生涯経路に機能するが、この機能における諸変化の結果に関する研究は、現在かなりみられるようになっている。例えば、ハルヴァン Harven(1975; 1982)とブレッド Pred (1981a)は、19 世紀の合州園において、労働時間と労働組織における諸変化が家族生活と「余暇」時間の組織にいかに影響をしたのかを考察している。同様にステイドーマン ジョーンズ Stedman Jones (1974)とスリフト(1981; 1984)は、労働時間における変化と義務教育の出現が、19 世紀のイギリスにおいて家族の性質、家庭の社会的定義、「余暇」時間の使用に、いかに相応した変化をもたらしたのかを立証している。ジョイス Joyce (1980)は、工場がいかにして 19 世紀のイギリスの工場町のなかで生きられた経験と大衆文化の支配的な焦点になったのか、そして重要なことであるが、工場生活の流れが、労働外の(わずかな)時間、つまり家庭、学校、余暇が取る形態のなかにどのようにして裂け目をいれたのかを、より詳細に特定の地域的な場で考察している。

さらに、ロカールがますます局所的でありえなくなっていることを指摘することが重要である。時間—空間の収束という現象は、いくつかの社会集団に共通の相互行為のための場が、非常に拡張したことを意味する。例えば中流階級は普通、労働者階級よりも広い空間的舞台にその存在を現す。相互行為はしばしばより遠距離になる。通勤やホワイトカラーの仕事と結び付けられる移動性の増加といった要因が、こうした現象を確かなものにしてきた。さらに社会諸集団の各ロカールは、その空間的なひろがりによって分化が一層進

み、その結果、相対的に自由な住宅市場や住宅不動産、マスメディアと教育システムの発達などの影響といった要因の結果である同質化の過程によって、さらに断片化されるようになった。空間はますます商品化された飛び地として作りだされ(移動性がこの諸空間を分化するのに重要である)、この空間の内部で日常生活の諸部分は、少なくとも他の社会諸集団から切り離されたひとつの社会集団によって営まれる(Giddens, 1981; Lefebvre, 1971; 1976; Soja, 1983)。ギデンス(1981)はこの傾向を、「隔離化(sequestration)」と呼んでおり、厳密な意味での商品化のみにとどまらず、アサイラムや病院のようないわゆる「全体的」あるいは「貪欲な(greedy)」制度の出現に、この隔離化を関連づけている。

しかしながらこれらの諸傾向は、これらのロカールの特定の交わりとして考えられる地域が、その固有性あるいはその独自性を喪失することを意味しない。マスメディア、学校の共通カリキュラムあるいは居住空間の同質化によって生じた共通経験は、独特の局所的嗜好 local preference によっていまだに媒介されている。さらに日常生活の大部分の範囲は、通勤のような慣習行動によって拡大しているかもしれないが、多くの個人はまだその日常的な存在のほとんどの部分を慣れ親しんでいる経路に従っている。さらに重要なことは、階級や他の形式の社会的分化の独特で蓄積的な歴史的パターンの結果として、地域の社会的複雑性はおそらく全体として減少するよりも増大しており、相互行為に対してより豊かな可能性をもたらしている。こうした観察は、局所的な階級構造における相違が無視されないどころか、むしろその重要性を一層増しているというアーリー(1981b, p.464)の主張によって強化される。「現代資本主義における重要な変化は、現在、各ロカリティーの経済的、社会的、政治的重要性が高まっていることである」。勿論ロカリティーの複雑性はその源泉として評価される。例えばクロスリック Crossick(1977)は、19世紀後半から20世紀初頭においてイギリスの中流階級が、その影響力を行使する手段として地方政治を把握していたと主張しており、この主張は都市社会運動に関する最近の多くの文献へ敷衍されるかもしれない観察である。

5.2 社会的行為の四つの側面

社会的行為の意味を、ある地域におけるそしてそれ

を通しての言説として把握することは容易な作業ではなく、しばしば暗示されているように、この目標がいまだに達成されていないことは真実である。構造化論学派の企図は、暫定的なものにとどまるが、特定の事例を三、四回参照することによって補足されたかなり一般的な主張にしばしば結びつけられる。この理論的な精緻化が真空のなかで生じないとしたら、理論的に特徴づけられた経験的研究に集中した計画が必要とされる(付論を見よ)。この最後の節において、私は最も緊急を要すると思われるこの計画の前理論的な四つの側面だけを考察するだろう。この四つの側面は、主体的行為と社会構造を双対性として研究することの重要性を肯定するものとして考えられるかもしれないが、より重要なのは、この双対性におけるそれぞれの変化がコンフリクト、つまり特定のコンテクストにおいて争われるので、この双対性におけるそれぞれの変化を歴史的かつ地理的に研究することであると考えられる。

5.2.1 人格と社会化：生涯経路の発展の歴史地理学

人格は、個人の心理的特徴の全体的な布置として考えられ、したがって、自己 Self (Rosenberg, 1979)、アイデンティティ (Robertson and Holzer, 1980; Abrams, 1982)、個性 individuality といった概念のような人格の異なった諸側面を包摂している。人格はギデンス(1979a)が主体の理論にとって必要と考える関係の三つのセット—無意識、慣習行動的な意識、言説的あるいは自省的意識を、必然的に含んでいる。コンテクスト的な意味で考えると、人格とは市民社会の内部に置かれた生活経路の過程に沿って、社会的諸関係が「内面化 (internalization)」あるいは「内部化 (interiorization)」される永続的な過程である。「社会的諸関係は身体を買き、その精神的な「核となる情熱 central fire」を構造づける。精神的構造は身体を中心に生きている社会構造である」(Bertaux and Bertaux-Wisau, 1981a, p.174)。したがって人格は、決して普遍的になりえない。むしろ社会経済的諸関係の連続的に遂行されかつ再遂行された表出であり、この諸関係はその最も基本的形式を除いて、ロカールと地域によって変化する。

セーヴ(1972; 1975; 1978)は、人間の人格に関する唯物論的でコンテクスト的な理論が「具体的な個人的一般理論」としてどのようなものになるか、に最も十全な解釈を与えている。この概念のなかで、成人の人格

は生涯経路の先端で時とともに前方へと運ばれていく一連の蓄積された活動—経験として現われる。これらの活動—経験は、「いかにしておこなうのか」、したがって「いかにしてあるのか」というメッセージを我々に教える。このメッセージは日常生活のルーティンによって絶えず再確認されるが、新しい活動—経験によって再解釈されるかもしれない—記憶は受動的ではなく能動的な過程である。セーヴは、人格の中心に、特定の活動—範疇に時間を配分する歴史的(暗黒のうちに地理的に特殊な構造があると主張する⁽⁹⁾)。したがって人格は、いくつかの範疇内におけるこの可変的な諸活動の客観的社會論理 objective social logic の表出である。換言すると、あなたはあなたがなすことであり、あなたはあなたがなすものであるのかをおこなう(この表現は、現在、特定の個人のコンテクストに位置付けられるけれども、ブルデュ(1977; 1980)のハビトゥスの概念と大きな相違はない)。

全く明らかなように、こうした人格の概念は、その論理的な帰結から、文化的なあやつり人形ないしは社会諸関係の閉ざされた単なるマイクロ宇宙としての個人という考えに接近する危険性がある。このことは、逆に個人がそのなかに位置付けられている社会と地域の優れた可能性の一側面として考えられねばならない個人の変換的な側面をより強調することにさえる。ある個人は個人的な行為の産物であるよりもむしろ、社会的行為の産物である。したがって人格の研究は、支配と抵抗の過程、両者の弁証法的な結び付きの過程としての社会化の研究を必然的かつ不可欠なものとして含んでいる。例えばウィリス(1977)は、労働者階級の児童たちが学校の権威に抵抗することから精神労働への抵抗をいかにして形成していったのか、を明らかにしている。肉体労働は精神労働に対して、見かけ上は対立する特徴—攻撃性、連帯、機転の鋭さ、力強さ(男性性)masculinity—を付与されており、自由の積極的な肯定になる。ここで抵抗は、労働者階級の児童が「自由な」選択を通じて労働者階級の仕事を受容するという効果をもつ。子供たちは自ら進んで自身の抑圧を受け入れる(Abram, 1982)。

人格と社会化の歴史的研究は急速に成長している分野であり、とくに教育に関する文献や階級の再生産(例えば Bettelheim, 1969; Holzner, 1972; Gerger and Hoppe, 1980; McCann, 1977; Schlumbohm, 1980)、家族(例えば, Hareven, 1975; 1982; Stone, 1977; Flan-

drin, 1979; Elder, 1980)。勿論、フランス史の心性の伝統(Darnton, 1978 の批判的展望を見よ)⁽¹⁰⁾で特にそうである。しかしより特定の主題をめくってグループ分けが可能である;例えば、清教主義(例えば、Bushman, 1967; Demos, 1970; Watkins, 1972; Delaney, 1976; Greven, 1977)あるいはファシズム(例えば、Merkl, 1975; 1980)。文学理論や記号論においてでさえ、人格と社会化の研究は顕著である。例えば、バフチン Bakhtin(1966)は、その驚くべき研究のなかで、ラブレの著作に民衆文化の経験の社会化の諸結果を考察している。ラブレの生涯経路は、公式の「高級」文化よりも民衆文化の流れに浸され、それに洗われている。こうした様々な視座が、時間と空間において、時間と空間に応じて変化しながら連続的に社会化される軌道としての人格という概念に付け加えられる。

こうした諸研究に刺激された人格と社会化へのコンテクスト的なアプローチの発見は、明らかにそうした研究を補足するものであるが、この補足は明瞭に区別されることが重要である。なぜなら生涯経路の視座においてみた場合に、この補足は人格形成が高度に弁別的な過程の不均等な流れであるという観念を特に付け加えるからである。社会における分割は、階級、性差、人種といった大きな合成的諸関係によってだけでは生じない。時間と空間という最も平凡であるがゆえに重要な力もまた作用する。おそらくこの諸力のなかで最も重要なものが、個人が生まれ落ちる人口集団であり⁽¹¹⁾、これは個人の生活機会、社会化というそれに引き続く歴史、「感覚の構造(structure of feeling)」(Williams, 1977; 1979; Thrift and Pred, 1981)⁽¹²⁾に影響を及ぼす。特定の人口集団は、諸社会集団によって区別されるが、時代と場所の異なった集合的経験を持っており、他の人口集団と比較して、特定の出来事の衝撃を示差的に体験する。こうした諸要因がその集団の人格を他の人口集団のそれから区別する。例えば、第一次世界大戦(例えば Wohl, 1980)や大恐慌(例えば Elder, 1974)の集合的経験について多くの研究がある。ある地域によって提供されるコンテクストも時には研究されている。例えば、エルダー Elder(1981)は、ほぼ類似した社会経済的な特徴を持ち、そのメンバーがカリフォルニアのオークランドあるいはバークレイで1928/1929年に生まれた二つの集団の生活過程を、大恐慌と戦後ブームを含む時代である1950年まで、跡づけている。この二つの集団は人格形成で明らかに異

なった歴史をもっており、その歴史は場所それ自体のコンテクストによって部分的に決定される。

522 洞察(penetration)と知識の有用性 イデオロギーとヘゲモニーの研究は、一見したところ不可避的に機能主義によって汚染されている。最も極端な三つの場合に、イデオロギーは、経済的刺激の受け手として作用するひとつの次元あるいはひとつの審級になるか、資本によって労働者階級に手渡され、無批判のうちに受容されるか、すべてのことが包括的な「国家のイデオロギー装置」⁽²⁰⁾を構成する部分へと還元されるか、である。コンテクスト的な意味において、イデオロギーもヘゲモニーもこうした仕方では考えられない。むしろ言説の全体的な構造のなかで、いくつかの社会的慣習行動は「イデオロギー的」あるいは「ヘゲモニー的」な諸効果をもっているかもしれないが、その効果は既存の支配的秩序を永続化するためには必ずしも機能せず、またこの秩序にその起源を持っていないかもしれない(Urry, 1981a)。こうした慣習行動が特定の主体にどのような影響を与えるかは、きわめて条件依存体であり、他の慣習行動の均衡に左右される。確かにイデオロギーやヘゲモニーといった一般的な観念が、特定の社会の現実分析に多くの貢献をしうことは疑わしい。むしろ上で指摘されてきたように、特定の社会諸集団(したがってその内部の諸個人)が到達することができる既存の社会秩序の理解あるいはそれへの洞察の程度を考慮することがより適切である。そうした理解は常に条件に依存しており、その理解への様々な限界に結び付けられるだろう。その結果、どの社会集団もその存在の諸条件の部分的な洞察以上のものにけっして到達しないだろう。このように考えるならば、一限界の創造的過程と創造の限界づけの過程として一多くの要因が考えられる。ひとつの重要な要因は、知識の有用性が変化することであり、それは地域という特定の舞台に左右され、その地域に存在する階級と他の集団の成員によって媒介されるであろう。相互に関連した知らないことの少なくとも五つの型が、ある時期にあるロカールあるいは地域に存在しうる(Thrift, 1979)⁽²¹⁾。

(a)知られていないこと unknown、知ることができないこと。ある特定の時間にある社会、ロカール、地域あるいはそれらの成員に全く知られていないという点で。

(b)理解されていないこと not understood。ある社会、ロカール、地域の意味の枠組のなかで理解されない、あるいはある社会、ロカール、地域のある構成員の意味の枠組のなかで理解されないという点で。

(c)隠されていること hidden。ある社会、ロカール、地域あるいはその一定の構成員から隠されているという点で。

(d)議論されていないこと undiscussed。ある社会、ロカール、地域あるいはその一定の構成員に「正しい」あるいは「自然である」と当たり前になっているという点で。

(e)曲解されていること distorted。ある社会、ロカール、地域あるいはその一定の構成員に曲解された仕方でのみ理解されている点で。

書字⁽²²⁾の知識や観念の獲得が空間的に変化することについての諸研究は、大抵、大スケールであったにもかかわらず、社会史において当たり前になっている(Burke, 1978; Martin, 1978; Darnton, 1979; Eisenstein, 1979)。しかしながら局所的な区域に適用されて、読み物の獲得過程に関する研究が現われはじめた(例えば、Judt, 1979; Ginzburg, 1980a; Spufford, 1979; 1981; Williams, 1980 と比較せよ)。これらの研究は、ひとりの個人が知ることに孤立の状態が持つ強い諸効果を示している。同様に、マスメディアの種別的な影響に関する研究が、より一般的になってきている(Williams, 1980 を見よ)。こうした研究は、知識の拡散とこの知識がそれを通して拡散する諸制度に関する情報とを結び合わさねばならない。そうした諸制度はたいてい、それぞれに固有の階級的傾向と偏向をもっており、それが敬重されない情報を構造づけている。例えば、19世紀のイギリスにおいて、様々なタイプの学校の空間的に異なった影響と同様に、力学学校やラディカルプレスの分布も同等に考えられるだろう(例えば、Laqueur, 1973; McCann, 1977; Stephens, 1973)。この新たな研究分野の興味深いが無視された部分は、人々が慣習行動的な理性から「自省的」あるいは「言説的」理性へと切り替える時に、人々の思考過程にある種の知識が与える影響についてである。ギンズブルグ Ginzburg (1980a)は、18世紀イタリアの粉引屋の研究のなかで、この影響について部分的に有効なひとつの事例を提供している。粉引屋に利用可能な書字の知識の目録を作ることで、ギンズブルグはその知識がいかに体系的に誤って領有されたのかを示している。な

せならその粉引屋は支配的な口承文化の内部で社会化されてきたからである。「物質」、「自然」、「単位」、「要素」、「実質」といった抽象的な単語はすべて、粉引屋が住んでいたある地域からの手がかかりと文字通りに関連づけられた。メタファーでさえ文字通りの意味で捉ええられる。例えば「チーズのような」は「チーズ」になる。そして神は父であり、神は領主である。誤って領有するこの過程が重要であるのは、それが政治的であるからだ。このような過程は現在、はっきりと類似したものをもっている。にもかかわらず我々はその過程についてほとんど知らない。人々は慣習行動的な理性から自省的な理性へいつ移行するのか。人々が自省的に考えるためにおこなっていることから、なにが人々を引き離すのか。これらの内面的思考過程の証拠が間接的(「語られない inspeech」)について Steiner, 1987 と比較せよ)にちがいないという事実は、そうした過程が研究不可能であることを意味しない。

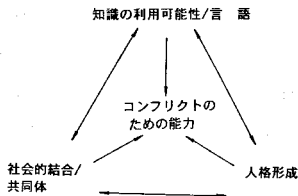
ギンズブルグ(1980a)の粉引屋の事例は、特定の地域内で、ある社会集団が社会的慣習行動を洞察することに関して、言説の創造的な要素としての言語の重要性を示している。なぜなら行うことが言語からその意味を獲得する時に、言語はまだ基本的には行うことからその意味を獲得する慣習行動的な道具であるから。したがって言語は常に、生成 becoming の状態にある(Pred, 1981b)。物質的世界の慣習行動と企図が変わる時に変化するの、意味論的な場であり、この場の変化は、旧来の限界が乗り越えられる際に、新しい限界が定められ、また古い言葉に新しい意味が発明され、あるいは新しい言葉と意味が現出させられることによって生じる。言語の諸限界は、ある地域的なコンテキストの中で実行される社会的慣習行動に密接に関係づけられる(Le Roy Ladurie, 1978; Kirk et al, 1983)。例えば、エリアス(Hélias, 1978, p.334)はプルトン語のなかで使用されなくなった全ての単語の一覧表を作成しているが、その消滅はひとつの特別な言説が粉々になってしまったことを反映している。

『残骸を除いて、私の初期の文明は何物も残してはいない。いまだに何本かの木はあるが、もはや森はない。その対象だけを語るならば、それが姿を消すやいなや、対象はその意味をほとんど喪失する。博物館はそうした対象のために建設されてきた。時には感動的な配慮によって、農家の大部屋が細部にいたるまで復元されている。しかしその部屋はもはや生きていないし、働いていない』。

5.2.3 社会的結合(Sociability)と共同体 ある地域のなかに位置づけられた社会集団がその存在諸条件を洞察する能力は、その社会的諸制度とこの制度が特有なものであるかどうかあるいは特有な仕方では結合されているかどうか、とに依存しているにちがいない。にもかかわらず社会諸制度の特定の組織がいかに理解を可能にし、促進しあるいは禁止するのかについて、我々は体系的にはほとんど知らない。かくして

『複雑で活動的な共同体がすべて、政治的に急進的であるとはかぎらない。…人々の間の積極的な政治論争の存在と不在にはほとんどあるいは全く関わりなく、ある規模以上の町が政治的な傾向を進展させると仮定するのに十分な理由がある。他の要因、とりわけ主要な地場の職業とそれらが組織化される仕方が介在して、こうした職業が促す考え方やアイデンティティがそこで働く人々に押しつけられる。社会的結合、つまり孤立した私的な存在よりも活動的な公的生活への傾向は、居住者が経済的に均質ではないにしても、少なくとも経済的に相互依存している小さな共同体において最も重要になるように思われる』(Judt, 1979, p.155)。

明らかに局所的なくつかの要因がある。居地域で生活する人々にとって、相互の出会いが困難であることはたいへん単純な事例である。しかしながらこのような要因は、時間が経つにつれて重要性を減少させる。おそらくより重要なことは、社会的結合の全体にわたる制度的なコンテキストである。例えば、ジュット Judt (1979)は、1881年から1914年にかけてのプロヴァンスにおいて、共同体の祭と教会への出席がいかにしてその重要性を減少し、それが共同体という同一の感覚に基づいてはいるがより意識的に政治的目標を志向する組合の会議、政治クラブ、カフェによって取って代られたのかあるいは拡大されたのか、を明らかにしている。こうした社会的結合の研究は、とくに移行期のフランスやスペインの農民社会に関する文献(例えば、Agulhon, 1970; Martinez-Alier, 1971; Kaplan, 1979; 1980)のみならず、現在では他の農民社会(例えば、Hunt, 1982)や都市史(White, 1979; 1980)に関する文献にもますます広く浸透している。社会的結合の問題は、共同体感覚 sense of community と場所の感覚 sense of place という相互に関連している諸問題と明らかに結び付いているが、そのような要因が作用する規模さえ問題を孕んでいる。実際にどのような区域が自立可能な特徴をもっているのか。その答はひとつの町、村、



第4図 コンテキストにおけるコンフリクトの諸要素

近隣あるいはただひとつの通りかもしれない(Clark, 1973; Macfarlane, 1977; Calhoun, 1978; Joyce, 1980; Neale, 1981を比較せよ)。共同体の感覚はおそらく地理的、歴史的に多様である。したがって共同体の感覚は、現在よりも第二次世界大戦以前の古典的なヨーロッパの労働者階級の共同体においてより強くなると仮定される(Joyce, 1980; MacIntyre, 1980; Therborn, 1980)。この感覚は、カフェ、通り、市場のようないくつかの共同施設を備えた多民族社会や地方においてより強い因子として考えられる。そのような感覚は次のようである。

『長期間の協同という問題。この協同の結果の多くは、参加者の心のなかにある意識的な目標ではない。より正確には、多くの行為ははっきりとは役立つなくとも、これらの「目標」に適合するかもしれない。ある特定の局面において、人々は社会的発展のあれこれの仕事を追求するように決心するかもしれない。人々が有用であると考えられるかもしれない慣習行動はのちに当たり前になるかもしれない。最も単純なレベルで、我々は皆、ある行為を選択する際、考慮する可能性の範囲を限定する必要がある。慣習は、この限定がおこなわれる上で最も重要な方法である；文化的規則がもうひとつの様式である；情報の有用性への社会的制約がその限界に加わる。慣習と文化の有効性は、明らかに状況や出来事に慣れ親しんでいることに依存している。共同体はこの慣れ親しみに依拠するとともに、それが生みだされるのを促進する。取引しなければならぬ人々の行動を予測できることは、共同体の構成員の社会的な利点で

ある。この能力は特定の人間を長期的に観察することのみならず、共同的諸関係の体系系からも生まれる。前者は関係性の集団的な定義とそれが含む義務及びそれが正当化する期待を提供する。後者は特定の関係性における人々の関わりを増大させ、人々が他者の期待によって、より一層影響されるようにする』(Calhoun, 1980)。

しかし共同体の感覚と場所の感覚は勿論、両刃の剣になりうる。ここで再び洞察と限界の両方が問題になる。ジョイス Joyce (1980, p.116)は19世紀の工場町における労働者階級の服従を、共同体と場所の感覚に正確に結び付けている。

『日常生活の環境 milieu は、あるエリートの権威と影響に満ちていた。社会学の用語で「共同的な社会的結合」と表現される近隣コミュニティの慣習は、階級の個性であったと同様に従属の源でもあった』。

もう一度、洞察と限界は複雑に結び付きあっている。

5.24 コンフリクトと能力 capacity 社会的行為の以上の三つの各側面は、相互に密接に関連した探究の一部として、特定の地域を通して生活する特定の社会集団が階級的コンフリクトや他の形式のコンフリクトを持続するための能力(Wright, 1978)やコンフリクトの本質のなかにまとめられる。能力とはここで、それ自身が歴史のかつ地理的に固有な仕方組織されている諸社

会集団が、他の社会集団に対して歴史的かつ地理的に特殊な様式で抵抗を組織化し維持する力能として考えられる。特に能力は、ある社会集団が新しい慣習行動をその言説のなかに導入することで、その存在の諸条件を洞察する力能とそれを批判することで連帯を表現する力能とから測ることが可能である。マルクスがフランス小農の「じゃがいも袋」を好んだことは、ある社会集団の能力に対する判断の(評判の悪い不正確な)ひとつの事例である。能力は、ある社会集団が変換する力をもった個人(人格形成、特定の知識形態、社会的結合の特定の形態を生み出す力能のひとつの機能であるが、それぞれは切り離されにくい(第4図を見よ)。これらの機能は地域の言説から切り離されえないのであり、それらは社会的慣習行動としてこの地域を通して生きられる。なぜならこれらの機能の本質はまさに、諸慣習行動の相互連関の特異性 particularity と結び付いているからであり、これらの慣習行動は社会論理 social logic (Offe and Wiesenath, 1980)の唯一的な形式とともに、特定の「選択の構造」(Przeworski, 1977)を構成している。[勿論そうした論理の古典的な事例は、モラルエコノミーというトムソン(1971)の考えに暗黙のうちにある慣習行動の合理性である (Scott, 1976; Popkin, 1980; Bechofer and Elliott, 1981 も見よ)]。この論理の逸脱は、「自発的な」抵抗と思われるものになるかもしれないが、実際にはこの抵抗はある地域での慣習行動の違反された組織の可視的な一部に過ぎない。グローグ (1979, p.278)は次のように指摘する:

「一見するとはなんの警告もなく、伝統的な用語では「自発的に」、勃発するストライキの場合に、労働組合や党の新聞のステレオタイプの公式化——労働闘争は「自然の所為」という基本的な力によって爆発した」——は、大抵の場合に行為の目的と原因を自分たちが特定できないことの合理づけに過ぎないことを、我々は示すことができる。この命題は、労働状況と労働組織を監視する警察当局が、しばしばストライキの場所とその参加者を予測できたという興味深い事実によって支持される。同じことが「社会的抵抗」や「集会的暴力」にあてはまる。ここでも出来事の突発と展開は自発的ではない。極端に言うならば、我々の分野において、自発性とは最悪の場合にブルジョア神話であり、せいぜい役に立たない心理学である。我々がよりよい用語を見つけたまで、その種別的な論理に我々の関心を方向づけながら、自発的行為よりも非-組織的行為について語ることを避ける」。

6 結論

『人間は文字通りの意味で政治的動物であり、単に群をなす動物ではなく、社会のなかでの個人になることができる動物である』(マルクス, 1973, p.84)。

本稿で、私は簡潔ではあったが、空間と時間のなかで生じねばならない「活動的な生活過程」とマルクスが呼んだものの豊富さと重要性を利用し、しかしながら決定という重要な要素を保持しながら、社会的行為についてのひとつの理論、つまりマルクスの理論を、社会的行為の構造化論的分析に結合することが可能であることを示そうと試みてきた。マルクス主義を実践的にも理論的にも無効にし、実際にマルクス主義を、解放のための力とともに巨大な抑圧のための力となるようにしてきたのが、社会的行為論の不在であることは間違いない(Dawe, 1979; Giddens, 1981)。より人間的 human(ヒューマニストではない)マルクス主義が必要とされるが、それは次のような実践的問題に理論的な尊重を与え得るものである。「超越的な目標なしに、利他的で思いやりがあり、威厳をもち良心的な仕方で行動するように人々を動機づけるという(実践的な)諸問題である。この問題は「理想」や「道徳」の問題ではなく、「慣習行動と制度に付着した振舞の日常的な慣習行動的な作用機構の問題である」(Hirst and Wooley, 1982, p.139)。

私が本稿で概観してきた立場は、全く初歩的な概括であり、さらなる研究がおこなわれる時に、修正へと開かれている。取り上げられてきた諸問題の多くについて比較的まだよく知られていない。しかしかなる問題であれ、空間と時間における社会的行為が、単なる後智恵として、あるいは社会構造の単なる刻印として、あるいはある程度は存在の自律的な領域に属するものとして、社会理論家によって論じられることをみるのが稀になりつつあるのは、ほぼ間違いない。空間と時間は、常にいたるところで社会的である。社会は、常にいたるところで空間的であり時間的である。概念は確かに平易ではあるが、おそらくその含意するところはいまようやく徹底的に考えられつつある。

謝辞 本稿は最初、オーストラリア国立大学太平洋研究所における社会科学方法論に関する会議(1981年10月)において草稿の形で発表された。そこで提示された主張を彫琢する際に、

多くの学問的視座から多くの同僚たちによって私に与えられた無私の援助に対して感謝したい。特にジム・ルイス、アラン・ベーカー、ジャック・バルバレット、ディベシュ・シャクラバルディ、フィリップ・コーク、ラリー・クロムウェル、ジョン・アイルズ、クリス・ハリス、ゲンナー・オルソン、アラン・ブレット、アンドリュー・セイアー、エド・ソージャ、ジョン・アーリー、ヒーター・ウィリアムズと匿名のレフリーに感謝したい。誰もこの論文に完全には同意しないだろう。私は、この人たちが最初は同意しなかった部分に少しでも同意してくれるように、またもともと同意していた部分にいまだに同意してくれることを望んでいる。

注

- (1)私はここで「伝達(transmission)」という機械的なメタファを用いることを考えていたが、「翻訳(translation)」によってもたらされる言語学的なメタファが意図された意味をより厳密に伝達すると思われる。
- (2)「人文主義(Humanistic)」地理学は難しい用語である。つまりこの用語は現象学から象徴的相互行為論をへて、現実には行動主義であるものになっているまで、諸アプローチの混乱を含んでいる。
- (3)構造主義とマルクスの構造的-発生的なアプローチとの間には通常は認識されていない明確な区別が存在する(Hall, 1980; Zeleny, 1980)を比較せよ。マルクスは構造主義者ではなかった。
- (4)マルクス(Marx and Engels, 1966, p.236)はかつて『哲学と現実世界の研究はオナニズムと性愛と同一の相互的関係をもっている』とからかった。社会科学が哲学によって説明されるべきなにかであると同様に、哲学も社会科学によって説明されるべきなにかである。哲学は社会科学の現実の研究に、それ自体ではあらかじめ、同等の保証も与えることはできない。
- (5)この強調は、私が経済的・社会的諸関係において生じていた変化を軽視しようとしていることを意味しない。むしろ人間の働きや次元におけるこれらの変化が、経済・社会的な変動を全ての人々にとってみやすくしたと主張することになる。
- (6)スマート Smart (1982)によるギデンズの批判は、ギデンズが人間の主体的行為を日常生活、個人そして個性と同一視していることを仮定している。本稿で示されるようにこのことは必ずしもあてはまらない。さらにスマートの師、フォーデーとさえ、「抵抗」の観念を持っている。
- (7)ダウ Dawe (1979)はここで、決定論的な社会構造と創造的な個人というマルクスの考えの間にひとつの矛盾をみているが、これは歴史が我々に教えることが起きているということである。
- (8)この翻訳はフェラロッチィ Ferrarotti (1981, p.23)からのもの

のである。サルトル(1964, p.56)に見つけられるものよりもはるかに優れた翻訳である。

- (9)私はこの三人の論者だけに関心を集中することを選んだ。他の多くの論者は、例えば、構造と主体的行為の非機能主義的理論の問題(例えば、Castoriadis, 1975; Dawe, 1979; Harre, 1978; 1979; Kosik, 1976; Sartre, 1964; 1976; Touraine, 1977; 1981; Urry, 1981a)や、自己の発達史(例えば、Elias, 1978; 1982; Habermas, 1979)によって最初は部分的に関心が重なるように思われるかもしれないものを持っている。しかしながらこれらの論者は大抵、これらの問題に体して任例的に合成的なアプローチを取っており、常にはないが普通は、こうした問題が空間と時間に埋め込まれている様式を無視している。
- (10)ここで「機能主義」は構造的かつマルクス主義的な機能主義を包括する一般的な用語として考えられる。最近の社会科学の多くを特徴づける一次的な誤りに適用され得るのがこの用語である。この用語は次のことを含んでいる。(1)社会システムに「欲求(needs)」を付与すること。(2)社会システムは機能的に秩序づけられ、まとまりをもつという仮定。(3)社会システムへの目的論的導入。(4)原因としての結果の特徴づけ。(5)同語反復の言明によって経験的に反証できない命題を作りあげること。マルクスの仕事の一部が機能主義であることは否定できない。まさにコーヘン(1978)がこのことを明らかにしている。マルクス主義における機能主義とその相神である還元主義)に対する優れた批判はギデンズ(1979a; 1981)とアーリー(1981a)にみられる。
- (11)フランス語の *Altois* は、19世紀のフランス解釈学から最近借用されており、詩学におけるその言葉の層ごう形態から借用されている。新しさの本質を記述するためにここでこの言葉を用いることの第一の問題は、社会行為の新しい形態を生産する内在的な社会的行為(相互行為)から生じる新しさの意味においてのみそれが用いられることである。第二の問題は、サルトル(1976)がすでに多少は違った用法でこの言葉を英語に導入していたことである。したがって「Altois」は、いまだに部分的には翻訳者の技巧であり、英語にはそのような言葉がないという理由だけで機能する英語への無批判な翻訳である。
- (12)バスカール(1979)は、構造の双対性を生産に限定し、再生産の諸条件の再生産を、プラクシス praxis の双対性と呼ぶ点で、ギデンズとは用法が若干異なる。
- (13)サルトル(1976)はここで、理解 comprehension、つまりその主体的行為者の目的によって人間活動を理解すること、思考 intellection つまりその行為者の目的に必ずしもよらずに人間活動を理解すること、の間の有用な区別をおこなう。同様に、ブルデュー(1977)は、我々がプラクティスの理論のみならず、理論の理論そして理論をプラクティスに関係づける理論(逆もまた同じ)を必要としていると指摘する。
- (14)慣習的、「機構」という単語は、実在論的アプローチの指標になってきた(Bhaskar, 1975; 1979; Keat and Urry, 1975; Sayer, 1979; 1981 を比較せよ)。科学のこの概念を推

- 属すべき点は多くあるが、未解決の問題もまだ多い。例えば、おそらく他の誰よりも実在論の考え方を普及させてきたキートンとアーリー(1975)が現在、個人的にあるいは二人一組になって、科学的実在論的な概念のいくつもの側面に概念を表明していることは興味深い(Keat, 1981; Keat and Urry, 1982; Urry, 1981a を比較せよ)。とくに差別的な結構構がいかんして相互に関係づけられるか、またそうした機構がいかんして証明されるのか、そして実在論のアプローチを取ることが自動的に還元主義を正当化しないことになるのかどうか、といった諸問題がある(Benton, 1981; Collier, 1981; McLennan, 1981)。別稿でこれらの主題を徹底的に究明しはじめることが求められるだろう。しかしながら構造化論学系(勿論バスカールを含めて)の仕事や、正確に実在論の主張を探究すること、とくに私が考えるに、偶有性 contingency の問題を探究するものとして考えることは可能である。
- (15) ウィナー Wiener(1981)はギデンズの研究を分析しているが、それは多くの誤解に基づいている。とくに諸社会の時間空間的構成に関するギデンズの研究を無視することで、ウィナーはギデンズをハーバマスと似た合成的な思想家へと変えてしまう。ウィナーは、ギデンズの研究が実際には構造的マルクス主義の正統性に挑戦している時に、ギデンズの仕事を構造的マルクス主義研究を補完するものとしたため、ギデンズの持つ批判力を無効にしまっている。
- (16) カピル族の状況に、自らの非常に抽象的なモデルを適用しようとするブルデュー(1977)という可能な例外がある。しかし文化資本に関するブルデューの研究は、まだ歴史的な種別性を欠いている。実際にグラナムとウィリアムズ(1980)は文化資本を変化する歴史的範疇として構築しなければならなかった。
- (17) 資本主義において、種別的な個性は経済的諸関係と無関係である。したがって賃金労働者は抽象的労働の、「労働それ自体の運び手」である。資本家も同様に資本—擬人化されたものであり、資本の担い手である。個性への同じ否定は他の範疇でも同様が生じる。例えば、貨幣と交換諸関係。
- (18) 労働過程はおそらく合成的なものとコンテクスト的なものとの間の主要な結び目である。第一に、時間の管理を行う一連の重要な媒介的概念的場である。第二に、「マルクスの言葉によると、『労働は、まず第一に人間が外的な自然に働きかけ自然を交換し、同時に人間が自らの本性を交換する、人間と自然の間の過程である』」(Gregory, 1982, p.214)の、(適切に考察された)労働過程は構造化のまさに核心である。勿論この文章の重点は、「適切に考察された」にある。第三に、労働過程は基軸となる概念であるけれども、ある地域にひとつ以上の労働過程が見いだされる場合に、労働過程をコンテクスト的に把握する方法を我々がまだ学んでいないことも真実である。最も成功している地域研究(例えば、Martinez-Alier, 1971; Kaplan, 1977; Judd, 1979)は、ひとつの労働過程が優位を占めている農業地域やニット産業のコミュニティや鉱業コミュニティに基づいて

- いる。プライトラッハとチュウニユ Pleitrah and Chenu (1979; 1981)の仕事はこの意味で重要である。なぜなら生活経路に影響を及ぼす複数の労働過程を説明しようとして試みているからである。
- (19) 私はセーフの研究における複雑なアナロジーとヒューマニスト的な強調には同意しない。セーフの研究に関する英語の要約としてジャルクナン Jalkunen(1977)とシェイム Shames (1981)を見よ。
- (20) こうした主題は、しばしば歴史において「擬人的記述 (prosopography)」として知られる方法を通じて研究される。「『つまり生活の集成的な研究によって歴史におけるある行為者集団の共通の背景の諸特徴を探究することである』(Stone, 1974, p.46)。この方法の地理学的な可能性としては、ピリンジ Billings(1892)を見よ。
- (21) 私は本稿で立ち入るつもりはないが、この要因と自我—アイデンティティの発達の様々なモデルとの相互作用がここで重要なものは明らかである(例えば、Erikson, 1959; 1963; 1975; Piaget, 1965; Kohlberg, 1971; Habermas, 1979)を見よ。
- (22) ウィリアムズ(1977; 1979)は、「感覚の構造(structure of feeling)」という概念によって、ある特定の社会、社会集団あるいは地域という存在の質を把握しようとしている。つまり社会、社会集団あるいは地域が、それを通して生きる人々にとって、人々がそれを生きる時点でのように立ち現われているのか。以上のことは、他の現象、例えば最近起こっている記憶の商品化と明らかに関わり合っている(Davis, 1979)を見よ。
- (23) アルチュセールが、ほとんどすべての慣習行動を国家装置に置き換えてしまったことは、イデオロギーを社会的慣習行動の母体(matrix)としてみることができただけに皮肉である。アルチュセールが国家の管轄域であると考えていた「装置」の多く、例えば家族、は市民社会のなかに存在する(Larrain, 1979; Theoborn, 1980; Urry, 1981a)を見よ。
- (24) この分類は別の(合成的な)脈絡で、ハーバマス(1982, p.264)によって最近、提起されているものに類似している。
- (25) 勿論、書字以外の他の多くの知識形態がある。私は必要とされるものの一例として書字をとりあげる。
- (26) これは完全な合理主義に賛意を示す主張と考えられるべきではない。アンダーソン Anderson (1980, p.61)が指摘するように『マルクス自身のなかに真の完全な沈黙がある—マルクス自身が歴史のなかで、利潤とイデオロギーに関し—とは対照的に、道徳と感情の力について適切な感覚を持たなかった。最良の時でさえマルクスもまた合理主義者であった』。むしろ主観性の構成の探究を必ず必要とするなにか、つまり慣習行動としての道徳を解決するためのひとつの主張である。

- Abercrombie N, 1980 *Class, Structure and Knowledge* (Basil Blackwell, Oxford)
- Abercrombie N, Hill S, Turner B S, 1980 *The Dominant Ideology Thesis* (George Allen and Unwin, Hempel Hempstead, Herts)
- Abrams P, 1972, "The sense of the past and the origins of sociology" *Past and Present* number 55, 18-32
- Abrams P, 1980, "History, sociology and historical sociology" *Past and Present* number 87, 3-16
- Abrams P, 1982, *Historical Sociology* (Open Books, Shepton Mallet, Somerset)
- Acasoli G L, 1981, "Knowing what you're doing. A review of Pierre Bourdieu's Outline of a Theory of Practice" *Canberra Anthropology* 4 23-51
- Aguilhon M, 1970 *La République au Village* (Librairie Plon, Paris)
- Albrow M, 1974, "Dialectical and categorical paradigms of a science of society" *Sociological Review* 22 183-201
- Althusser L, 1969, *For Marx* (Penguin Books, Harmondsworth, Middx) [河野健二・田村綱・西川長夫訳(1994): 『マルクスのために』 平凡社]
- Anderson P, 1980 *Arguments within English Marxism* (New Left Books, London)
- Baker A R H, 1979, "Historical geography: a new beginning?" *Progress in Historical Geography* 3 560-570
- Bakhtin M, 1968 *Rabelais and His World* (MIT Press, Cambridge, MA) [川端香男里訳(1974) 『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』 せりか書房]
- Bechhofer F, Elliott B, 1981, "Petty Property: the survival of a moral economy" in *The Petite Bourgeoisie. Comparative Studies of the Uneasy Stratum* Eds F Bechhofer, B Elliott (Macmillan, London) pp 182-199
- Benton T, 1981, "Realism and social science. Some comments on Roy Bhaskar's The Possibility of Naturalism", *Radical Philosophy Spring Issue*, 13-21
- Berger P, Luckmann T, 1966 *The Social Construction of Reality. A Treatise in the Sociology of Knowledge* (Penguin Books, Harmondsworth, Middx) [山口節郎訳(1977) 『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』 新曜社]
- Bertaux D(ED.), 1981 *Biography and Society. The Life History Approach in the Social Sciences* (Sage, Beverley Hills, CA)
- Bertaux D, Bertaux-Wiaume I, 1981a, "Artisanal bakery in France: how it lives and why it survives" in *The Petite Bourgeoisie. Comparative Studies of the Uneasy Stratum* Eds F Bechhofer, B Elliott (Macmillan, London) pp 155-181
- Bertaux D, Bertaux-Wiaume I, 1981b, "Life stories in the baker's trade" in *Biography and Society* Ed. D Bertaux (Sage, Beverley Hills, CA) pp 169-190
- Bertaux-Wiaume I, 1977, "The life-history approach to migration" *Oral History* 7 26-32
- Bettelheim B, 1969 *The Children of the Dream* (Macmillan, New York)
- Bezanson A, 1922, "The early use of the term 'industrial revolution'" *Quarterly Journal of Economics* 36 343-349
- Bhaskar R, 1975 *A Realist Theory of Science* (Leeds Books, Leeds)
- Bhaskar R, 1979 *The Possibility of Naturalism. A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences* (Harvester Press, Hassocks, Sussex)
- Billinge M, 1982 "Reconstructing societies in the past: the collective biography of local communities" in *Period and Place. Research Methods in Historical Geography* Eds A R H Baker, M Billinge (Cambridge University Press, Cambridge) pp 19-32
- Bleitrach D, Chenu A, 1979 *L'Usine et la Vie. Luttes Régionales: Marseilles et Fos* (Maspero, Paris)
- Bleitrach D, Chenu A, 1981, "Modes of domination and everyday life: some notes on recent research" in *City, Class and Capital. New developments in the Political Economy of Cities and Regions* Eds M Harloe, E Labas (Edward Arnold, London) pp 105-114
- Bourdieu P, 1977 *Outline of a Theory of Practice* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Bourdieu P, 1980 *Le Sens Pratique* (Editions de Minuit, Paris) [今村仁司・港道隆訳(1988・1990) 『実践感覚』 1, 2 みすず書房]
- Briggs A, 1979, "The language of mass and masses in nineteenth century England" in *Ideology and the Labour Movement* Eds D Martin, D Rubinstein (Croom Helm, Becknham, Kent)
- Brittan A, 1977 *The Privatized World* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxen)
- Burke P, 1978 *Popular Culture in Early Modern Europe* (Maurice Temple Smith, London) [中村賢二郎・谷泰訳(1988) 『ヨーロッパの民衆文化』 人文書院]
- Burke P, 1980 *Sociology and History* (George Allen and Unwin, Hemel Hempstead, Herts) [森岡敬一郎訳(1986) 『社会学と歴史学』 鹿嶋通信]
- Burnett J (Ed.), 1974 *Useful Toil: Autobiographies of working people from the 1820's to the 1920's* (Allen Lane, London)
- Bushman R L, 1967 *From Puritan to Yankee: Character and Social Order in Connecticut 1690-1765* (Harvard University Press, Cambridge, MA)
- Calhoun C J, 1978, "History, anthropology and the study of communities" *Social History* 3 363-373
- Calhoun C J, 1980, "Community: towards a variable concep-

- tualization for comparative research" *Social History* 5
105-129
- Carlstein T, 1981, "The sociology of structuration in time and space: a time-geographic assessment of Giddens's theory" *Svensk Geografisk Årsbok* 57 41-57
- Castoriadis C, 1975 *L'Institution Imaginaire de la Société* third edition (Éditions du Seuil, Paris) [江口幹訳(1994)『理念が社会を創る』法政大学出版局]
- Clark D B, 1973, "The concept of community: a re-examination" *Sociological Review* 21 63-82
- Clegg S, 1979 *The Theory of Power and Organisation* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon)
- Cohen G A, 1978 *Karl Marx's Theory of History: A Defense* (Oxford University Press, London)
- Collier A, 1981, "Scientific realism and the human world: the case of psychoanalysis" *Radical Philosophy* number 16, 8-18
- Crossick G, 1977, "The emergence of the lower middle class in Britain: a discussion" in *The lower Middle Class in Britain 1870-1914* Ed. G Crossick (Croom Helm, London) pp 11-60 [島浩二他訳(1990)『イギリス下層中産階級の社会史』法律文化社, 1-55]
- Darnton R, 1978, "The history of mentalities: recent writings on revolution, criminality and death in France" in *Structure, Consciousness, and History* Eds R H Brown, S M Lyman (Cambridge University Press, Cambridge) pp 106-136
- Darnton R, 1979 *The Business of the Enlightenment. A Publishing History of the Encyclopaedia 1775-1800* (Harvard University Press, Cambridge, MA)
- Davis F, 1979 *Yearning for Yesterday. A Sociology of Nostalgia* (Free Press, New York)
- Dawe A, 1970, "The two sociologies" *British Journal of Sociology* 21 207-218
- Dawe A, 1979, "Theories of social action" in *A History of Sociological Analysis* Eds T Bottomore, R Nisbet (Heinemann Educational Books, London) pp 362-417
- Delaney P, 1976 *The Puritan Experience* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon)
- Demos J, 1970 *A Little Commonwealth, Family Life in Plymouth Colony* (Oxford University Press, London)
- Dunford M F, 1981, "Historical materialism and geography" *research paper 4*, Department of Geography, University of Sussex, Brighton, England
- Eisenstein E L, 1979 *The Printing Press as an Agent of Change* 2 volumes (Cambridge University Press, Cambridge)
- Elder G, 1974 *Children of the Great Depression* (University of Chicago Press, Chicago IL) [本田・伊藤他訳(1986)『大恐慌の子どもたち』明石書店]
- Elder G, 1980 *Family Structure and Socialization* (Arno Press, New York)
- Elder, G 1981, "History and the life course" in *Biography and Society. The Life History Approach in the Social Science* Ed. D Bertaux (Sage, Beverley Hills, CA) pp 77-115
- Eliaz N, 1978 *The Civilizing Process. The History of Manners* (Basil Blackwell, Oxford)
- Eliaz N, 1982 *The Civilizing Process. State Formation and Civilization* (Basil Blackwell) [赤井常爾・中村元保・吉田正勝訳(1977)『文明化の過程(上)』法政大学出版局、波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳(1978)『文明化の過程(下)』法政大学出版局]
- Erikson E H, 1969 *Identity and the Life Cycle* (W W Norton, New York) [小此木啓吾訳(1973)『自我同一性』誠信書房]
- Erikson E H, 1963 *Childhood and Society* second edition (W W Norton, New York) [仁科弥生訳(1977・1980)『幼児期と社会』1,2 みすず書房]
- Erikson E H, 1975 *Life History and the Historical Moment* (W W Norton, New York)
- Faraday A, Plummer K, 1979, "Doing life histories" *Sociological Review* 27 773-798
- Ferrarotti F, 1981, "On the autonomy of the biographical method" in *Biography and Society. The Life History Approach in the Social Sciences* Ed. D. Bertaux (Sage, Beverley Hills, CA)
- Flandrin J, 1979 *Families in Former Times. Kinship, Household and Sexuality* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Foster J, 1974 *Class Struggle and the Industrial Revolution* (Weidenfeld and Nicolson, London)
- Foster-Carter A, 1978, "The modes of production controversy" *New Left Review* 107, 47-77
- Foucault M, 1972 *The Archaeology of knowledge* (Tavistock Publication, Andover, Hants) [中村雄二郎訳(1981)『知の考古学』河出書房新社]
- Foucault M, 1977 *Discipline and Punish* (Allen Lane, London) [田村銀蔵訳(1977)『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社]
- Fraser R, 1979 *Blood of Spain: The Experience of Civil War, 1936-1939* (Allen Lane, London)
- Garnham N, Williams R, 1980, "Pierre Bourdieu and the sociology of culture: an introduction" *Media, Culture and Society* 2 209-223
- Gellner E, 1964 *Thought and Change* (Weidenfeld and Nicolson, London)
- Gerger T, Hoppe G, 1980 *Education and Society. The Geographer's View* (Almqvist and Wiksell, Stockholm)
- Giddens A, 1973 *The Class Structure of the Advance Societies* (Hutchinson, London) [市川純洋訳(1977)『先進社会の

階級構造」みすず書房]

- Giddens A. 1976 *New Rules of Sociological Method* (Hutchinson, London) [松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳(1987)『社会学の新しい方法基準—理解社会学の共感的批判』而立書房]
- Giddens A. 1977 *Studies in Social and Political Theory* (Macmillan, London) [宮島喬・江原由美子・森反幸夫・俣田徹・本間直子・田中秀雄・百々葦子(1986)『社会理論の現代像』みすず書房]
- Giddens A. 1979a *Central Problems in Social Theory, Action, Structure and Contradiction in Social Analysis* (University of California Press, Berkeley, CA) [友枝敏雄・今田高俊・森龍雄訳(1989)『社会理論の最前線』ハーベスト社]
- Giddens A. 1979b, "Postscript 1979" in *The Class Structure of the Advanced Societies second edition* (Hutchinson, London)
- Giddens A. 1981 *A Contemporary Critique of Historical Materialism* (Macmillan, London)
- Ginzburg C. 1976, "High and low: the theme of forbidden knowledge in the late 16th and 17th centuries" *Past and Present number 73*, 216-232 [竹山博英訳(1988)「高きものと低きもの—十六世紀、十七世紀の禁じられた知について—」『神話・高窓・微鏡』せりか書房]
- Ginzburg C. 1980a, "Clues. Roots of a scientific paradigm" *Theory and Society 7* 273-288
- Ginzburg C. 1980a *The Cheese and The Worms. The Cosmos of a Sixteenth Century Miller* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon) [杉山光信訳(1984)『チーズとうじ虫』みすず書房]
- Ginzburg C. 1980b, "Morelli, Freud and Sherlock Holmes: clues and scientific method" *History Workshop number 9*, 5-36
- Gouldner A W. 1980 *The Two Marxisms. Contradictions and Anomalies in the Development of Theory* (Macmillan, London)
- Gregory D. 1978 *Ideology, Science and Human Geography* (Hutchinson, London)
- Gregory D. 1981, "Human agency and human geography" *Transactions of the Institute of British Geographers new series 6* 1-18
- Gregory D. 1982, "Solid geometry: notes on the recovery of spatial structure" in *A Search for Common Ground* Eds. P. Gould, G. Olsson (Pion, London) pp 187-219
- Greven P. 1977 *The Protestant Temperament. Patterns of Child Rearing, Religious Experience and the Self in Early America* (Alfred Knopf, New York)
- Groh D. 1979, "Base-processes and the problem of organization: outline of a social history research project" *Social History 4* 265-283
- Habermas J. 1979 *Communication and the evolution of Society* (Heinemann Educational Books, London)
- Habermas J. 1982, "A reply to my critics" in Habermas. *Critical Debates* Eds J B Thompson, D Held (Macmillan, London)
- Hägerstrand T. 1970, "What about people in regional science?" *Papers of Regional Science Association 24* 7-21 [荒井良雄・川口太郎・岡本幹平・神谷浩夫編訳(1989)：『生活の空間—都市の時間』古今書院]
- Hägerstrand T. 1973, "The domain of human geography" in *Directions in Geography* Ed. R J Chorley (Methuen, Andover, Hants) pp 67-87
- Hägerstrand T. 1974, "Tidgeografisk beskrivning-syfte och postulat" *Svensk Geografisk Årsbok 50* 86-94
- Hall S. 1980, "Cultural studies: two paradigms" *Media, Culture and Society 2* 57-72
- Hareven T K. 1975, "Family time and industrial time. Family and work in a planned corporation town, 1900-1924" *Journal of Urban History 1* 365-389
- Hareven T K. 1982 *Family Time and Industrial Time. The Relationship between the Family and Work in a New England Industrial Community* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Hareven T K. Langenbach R. 1978 *Amoskeag. Life and Work in an American Factory-City* (Pantheon Books, New York)
- Harré R. 1978, "Architectonic man: on the structuring of lived experience" in *Structure, Consciousness and History* Eds R H Brown, S M Lyman (Cambridge University Press, Cambridge) pp 139-172
- Harré R. 1979 *Social Being. A Theory for Social Psychology* (Basil Blackwell, Oxford)
- Harrison R. 1981, "Marxism as nineteenth century critique and twentieth century ideology" *History 66* 208-220
- Hawthorn G. 1976 *Enlightenment and Despair. A History of Sociology* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Helias P. 1978 *The Horse of Pride. Life in a Breton Village* (Yale University press, New Haven, CT)
- Heller A. 1982, "Habermas and Marxism" in Habermas. *Critical Debates* Eds J B Thompson, D Held (Macmillan, London) pp 21-41 Hey D G. 1974 *An English Rural Community. Middle under the Tudors and Stuarts* (Leicester University Press, Leicester)
- Hirst P, Woolley P. 1982 *Social Relations and Human Attributes* (Tavistock Publications, Andover, Hants)
- History Workshop, 1979, "Editorial: urban history and local history" *History Workshop number 8*, iv-iv
- Hobsbawm E. 1980, "The survival of narrative: some comments" *Past and Present number 86*, 3-8
- Hollis M. 1977 *Models of Man* (Cambridge University Press,

- Cambridge)
- Holzner D, 1972 *Reality Construction in Society* (Schenkman, Cambridge MA)
- Hunt D, 1982, "Village culture and the Vietnamese revolution" *Past and Present* number 94, 131-257
- Jones K, Williamson K, 1979, "The Birth of the schoolroom. A Study of the transformation in the discursive conditions of English popular education in the first half of the nineteenth century" *Ideology and Consciousness Autumn issue*, 58-110
- Joyce P, 1980 *Work, Society and Politics. The Culture of the Factory in Late Victorian England* (Harvester Press, Hassocks, Sussex)
- Judt T, 1979 *Socialism in Provence 1871-1914. A Study in the Origins of the Modern French Left* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Julknen R, 1977, "A contribution to the categories of social time and the economy of time" *Acta Sociologica* 20 5-24
- Kaplan T, 1977 *Anarchists of Andalusia 1868-1903* (Princeton University press, Princeton, NJ)
- Keat R, 1981 *The Politics of Social Theory. Freud, Habermas and the Critique of Positivism* (Basil Blackwell, Oxford)
- Keat R, Urry J, 1975 *Social Theory as Science* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on Thames, Oxon)
- Keat R, Urry J, 1982 *Social Theory as Science second edition* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on Thames, Oxon)
- Keesing R M, 1981, "Literal metaphors and anthropological metaphysics: the problematic of cultural translation" available as a mimeograph from Department of Anthropology, Research School of Pacific Studies, Australian National University, Canberra, Australia
- Kennedy B A, 1979, "A naughty world" *Transactions of the British Geographers* 4 550-558
- Kirk J M, Sanderson S F, Widdowson J D A (Eds), 1983 *Studies in linguistic Geography* (Croom Helm, London)
- Kohlberg L, 1971, "From is to ought" in *Cognitive development and Epistemology* Ed. T Mischel (Academic Press, New York)
- Kosik K, 1976 *The Dialectics of the Concrete* (D Reidel, Dordrecht, The Netherlands) [花崎幸平訳(1977)『具体的なものの弁証法』せりか書房]
- Laing R D, 1971 *The Politics of the Family* (Penguin Books, Harmondsworth, Middx)
- Lakoff G, Johnson M, 1980 *Metaphor We Live By* (Chicago University Press, Chicago IL)
- Laqueur T W, 1973 *Religion and Respectability* (Yale University Press, New Haven, CT)
- Larrain J, 1979 *The Concept of Ideology* (Hutchinson, London)
- Layder D, 1981 *Structure, Interaction and Social Theory* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon)
- Lazarsfeld P, 1972, "Historical notes on the empirical study of action: an intellectual odyssey" in *Qualitative Analysis. Historical and Critical Essays* Ed. P. Lazarsfeld (Allen and Becon, Boston, MA) pp 53-105
- Lefebvre H, 1971 *Everyday Life in the Modern World* (Allen Lane, London)
- Lefebvre H, 1976 *The Survival of Capitalism* (Allison and Busby, London)
- Le Roy Ladurie E, 1978 *Moutaillou. Cathars and Catholics in a French Village 1299-1324* (Scolar Press, London) [井上幸治・渡辺昌英・波木啓純一訳(1990・1991)『モンタイユ』上・下 刀水書房]
- Lejnine J, 1981, "Urban policy and local power: some aspects of recent research in Lille" in *City, Class and Capital: New Developments in the Political Economy of Cities and Regions* Eds M Harloe, E Labas (Edward Arnold, London) pp 89-104
- Lowenstein W, 1978 *Weevils in Flour. An Oral Record of the 1930's Depression in Australia* (Hyland House, Melbourne)
- Macfarlane A, 1970 *The Family Life of Ralph Josselin, a seventeenth Century Clergyman. An Essay in Historical Anthropology* (Cambridge University Press)
- Macfarlane A, 1977, "Historical anthropology and the study of communities" *Social History* 5 631-652
- MacIntyre S, 1980 *Little Moscovs. Communism and Working Class Militancy in Inter-War Britain* (Croom Helm, London)
- McCann P (Ed.), 1977 *Popular education and Socialization in the Nineteenth Century* (Methuen, Andover, Hants)
- McLennan G, 1981 *Marxism and the Methodologies of History* (New Left Books, London)
- Marr D, 1981 *Vietnamese Tradition on Trail 1920-1965* (University of California Press, Berkeley, CA)
- Martensson S, 1979, "On the formation of biographies in space-time environments" *Lund Studies in Geography series B* number 47
- Martin H J, 1978, "The bibliotheque bleue. Literature for the masses in the Ancien Regime" *Publishing History* 3 70-102
- Martinez-Alier J, 1971 *Labourers and Landowners in Southern Spain* (Rowman and Littlefield, Totowa, NJ)
- Marx K, 1973 *Grundrisse* (Penguin Books, Harmondsworth, Middx) [高木幸八郎監訳(1958-1965)『経済学批判要綱』I ~ V 大月書店]
- Marx K, Engels F, 1956 *The Holy Family* (Lawrence and Wishart, London) [『聖家族』岩波書店]

- Marx K, Engels F, 1969 *Selected Correspondence* (Lawrence and Wishart, London)
- Marx K, Engels F, 1965 *The German Ideology* (Lawrence and Wishart, London) [古在由重訳(1966)『ドイツイデオロギー』岩波書店]
- Matza D, Wellman D, 1980, "The ordeal of consciousness" *Theory and Society* 9 1-27
- Merkel P H, 1975 *Political Violence under the Swastika* (Princeton University Press, Princeton, NJ)
- Merkel P H, 1980 *The Making of a Stormtrooper* (Princeton University Press, Princeton, NJ)
- Molina V, 1979 "Notes on Marx and the theory of individuality" in *An Ideology Centre for Contemporary Cultural Studies* (Hutchinson, London) pp 230-258
- Neale R S, 1981 *Bath. A Social History 1680-1860* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon)
- Niehammer L (Ed.), 1980 *Lebensführung und kollektives Gedächtnis die Praxis der 'Oral History'* (Syndikat, Frankfurt)
- Offe C, Wiesenthal H, 1980, "Two logics of collective action: theoretical notes on social class and organisation form" in *Political Power and Social Theory* volume 1, Ed, M Zeitlin (JAI Press, Greenwich, CT) pp 67-115
- Peet R J, 1982, "International capitalism, international culture" in *The Geography of Multinationals* Eds M J Taylor, N J Thrift (Croom Helm, London) pp 275-302
- Piaget J, 1965 *The Moral Development of the Child* (Free Press, New York)
- Piñon M, 1978 *Besoins et habitus. Critique de la Notion de Besoin et Théorie de la Pratique* (Centre de Sociologie Urbain, Paris)
- Popkin S, 1980, "The rational peasant. The political economy of peasant society" *Theory and Society* 9 411-471
- Pred A, 1981a, "Production, family and "free-time" projects: a time-geographic perspective on the individual and socio-cultural change in nineteenth-century US cities" *Journal of Historical Geography* 7 3-36
- Pred A, 1981b, "Social production and the time-geography everyday life" *Geografiske Annaler* 63 series B 5-22
- Przeworski A, 1977, "Proletariat into a class: the process of class formation from Karl Kautsky's The Class Struggle to recent controversies" *Politics and Society* 4 342-401
- Ranson S, Hinings B, 1980, "The structuring of organisational structures" *Administrative Science Quarterly* 25 1-17
- Ricoeur P, 1981 *Hermeneutics and the Social Sciences. Essays on Language, Action and Interpretation* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Robertson R, Holzner B, 1980 *Identity and Authority. Explorations in the Theory of Society* (Basil Blackwell, London)
- Rose D, 1981, "Home-ownership and industrial change: the struggle for a 'separate sphere'" *WP-25* Department of Urban and Regional Studies, University of Sussex, Brighton, England
- Rosenberg M, 1979 *Conceiving the Self* (Basic Books, New York)
- Sahlins M, 1976 *Culture and Practical Reason* (Chicago University Press, Chicago, IL) [山内純訳(1987)『人類学と文化記号論』法政大学出版局]
- Samuel R, 1981, "People's history" in *People's History and Socialist Theory* Ed, R Samuel (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon) pp xiv-xxxvii
- Sartre J-P, 1960 *Questions de Methode* (Gallimard, Paris) [平井啓之(1962)『方法の問題』人文書院]
- Sartre J-P, 1964 *The Problem of method* (Methuen, Andover, Hants)
- Sartre J-P, 1978 *Critique of Dialectical Reason. I. Theory of Practical Ensembles* (New left Books, London) [竹内芳郎・矢内原伊作訳(1962)『弁証法的理性批判 第一巻 実践的総体の理論』人文書院]
- Sayer A, 1981, "Abstraction: a realist interpretation" *Radical Philosophy* number 28, 6-16
- Sayer D, 1979 *Marx's Method. Ideology, Science and Critique in Capital* (Harvester Press, Hassocks, Sussex)
- Schlumbohm J, 1980, "Traditional" collectivity and modern individuality: some questions and suggestions for the historical study of socialization. The examples of the German lower and upper bourgeoisie around 1800" *Social History* 5 71-103
- Scott J, 1976 *The Moral Economy of Peasant* (Yale University Press, Cambridge)
- Selbourne D, 1980, "On the methods of History Workshop" *History Workshop* number 9, 150-161
- Sennett R, Cobb J, 1972 *The Hidden Injuries of Class* (Cambridge University Press)
- Seve L, 1972 *Marxisme et Théorie de la Personnalité second edition* (Editions Sociales, Paris) [大津真作訳(1978)『マルクス主義と人格の理論』法政大学出版局]
- Sève L, 1975 *Marxism and the Theory of Human Personality* (Lawrence and Wishart, London)
- Sève L, 1978 *Man in Marxist Theory and the Psychology of Personality* (Harvester Press, Hassocks, Sussex)
- Shames C, 1981, "The scientific humanism of Lucian Seve" *Science and Society* 45 1-23
- Simpson G G, 1963, "Historical science" in *The Fabric of Geology* Ed, C C Albritton (Stanford University Press, Stanford, CA) pp 24-48
- Slagstad R, 1980, "On Norwegian Marxism" *Marxist Perspectives* 2 104-115

- Smart B, 1982, "Foucault, sociology and the problem of human agency" *Theory and Society* 11 121-141
- Soja E, 1983, "A materialist interpretation of spatiality" *Environment and Planning d: Society and Space* 1 Forthcoming
- Spufford M, 1974 *Contrasting Communities. English Villagers in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Spufford M, 1979, "First steps in literacy: the reading and writing experiences of the humblest seventeenth century autobiographers" *Social History* 4 407-435
- Spufford M, 1981 *Small Books and Pleasant Histories. Popular Fiction and Its Readership in Seventeenth-Century England* (Methuen, Andover, Hants)
- Stedman Jones G, 1974, "Working-class culture and working class politics in London, 1870-1900. Notes on the remarking of a working class" *Journal of Social History* 4 460-508
- Stedman Jones G, 1978, "Class expression vs. social control" *History Workshop* number 4, 163-170
- Steiner G, 1978 *On Difficulty and Other Essays* (Oxford University Press, London)
- Stephens W B, 1973, "Regional variations in education during the industrial revolution" *Educational Administration and History Monograph* 1 (University of Leeds, Leeds)
- Stone L, 1974, "Prosopography" *Daedalus Winter issue*, 46-79
- Stone L, 1977 *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (Weidenfeld and Nicolson, London) [北本正章訳(1991)『家族・性・結婚の社会史 1500年-1800年のイギリス』勁草書房]
- Stone L, 1979, "The revival of narrative" *Past and Present* number 85, 3-24
- Storch R D, 1977, "The problem of working class leisure. some roots of middle-class moral reform in the industrial north; 1825-1880" in *Social Control in Nineteenth Century Britain* Ed. A P Donajkowski (Croom Helm, London) pp 138-162
- Therborn G, 1980 *The Ideology of Power and the Power of Ideology* (New Left Books, London)
- Thompson E P, 1963 *The Making of the English Working Class* (Weidenfeld and Nicolson, London)
- Thompson E P, 1971, "The moral-economy of the English crowd in the eighteenth century" *Past and Present* number 50, 76-136
- Thompson E P, 1978 *The Poverty of Theory and Other Essays* (Merlin Press, London)
- Thompson K, 1980, "Folklore and sociology" *Sociological Review* 28 249-277
- Thompson P, 1975 *The Edwardians. The Remaking of British Society* (Weidenfeld and Nicolson, London)
- Thompson P, 1978 *The Voice of the Past. Oral History* (Oxford University Press, London)
- Thompson P, 1981, "The new oral history in France" in *People's History and Socialist Theory* Ed. R Samuel (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon) pp 567-577
- Thompson T, 1980 *Edwardian Childhoods* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon) pp 567-577
- Thrift N J, 1977 *An Introduction to Time-Geography. Concepts and Techniques in Modern Geography* 13 (Geo-Abstract, Norwich)
- Thrift N J, 1979, "Limits to knowledge in social theory: towards a theory of human practice" available as a mimeograph from Department of Human Geography, Australian National University, Canberra, Australia
- Thrift N J, 1980, "Reviews of various books on local history" *Environment and Planning A* 12 885-862
- Thrift N J, 1981, "'Owners' time and own time' the making of a capitalist time-consciousness 1300-1800" in *Space and Time in Geography* Ed. A R Pred (C W K Gleaser, Stockholm) pp 56-84
- Thrift N J, 1984 *Spontaneity or Order? Time Consciousness in Medieval and Early Modern England* (Cambridge University Press, Cambridge) forthcoming
- Thrift N J, Forbes D K, 1983, "A landscape with figures: political geography with human conflict" *Political Geography Quarterly* 2 forthcoming
- Thrift N J, Pred A B, 1981, "Time-geography: a new beginning" *Progress in Human Geography* 5 277-286
- Thrift N J, Williams P, 1984, "A Class-based urban geography" forthcoming
- Touraine A, 1977 *The Self-Production of Society* (Chicago University Press, Chicago, IL)
- Touraine A, 1981 *The Voice and the Eye. An Analysis of Social Movements* (Cambridge University Press, Cambridge) [梶田孝道訳(1983)『声とまなざし—社会運動の社会学』新泉社]
- Tribe K, 1978 *Land, Labour and Economic Discourse* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-thames, Oxon)
- Tribe K, 1981 *Genealogies of Capitalism* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-thames, Oxon)
- Urry J, 1981a *The Anatomy of Capitalist Societies. The Economy, Civil Society and the State* (Macmillan, London) [清野正義監訳(1986)『経済・市民・社会』法律文化社]
- Urry J, 1981b, "Localities, regions and social class" *International Journal of Urban and regional research* 5 455-474

- Veltmeyer H, 1978, "Marx's two methods of sociological analysis" *Sociological Inquiry* 48 101-112
- Vincent D, (Ed), 1977 *Testaments of Radicalism* (Europa, London)
- Vincent D, 1980, "Love and death and the nineteenth century working-class" *Social History* 5 223-247
- Vincent D, 1981 *Bread, Knowledge and Freedom. A Study of Nineteenth-Century Working-Class Autobiography* (Europa, London)
- Watkins O C, 1972 *The Puritan Experience: Studies in Spiritual Experience* (Schocken Books, New York)
- Weiner R R, 1981 *Cultural Marxism and Political Sociology* (Sage, Beverley Hills, CA)
- Weintraub K J, 1978 *The Value of the Individual, Self and Circumstance in Autobiography* (Chicago University Press, Chicago IL)
- White J, 1979, "Campbell Bunk: a community in London between the wars" *History Workshop* number 8, 1-49
- White J, 1980 *Rothschild Building: Life in an East End Tenement Block 1887-1920* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on Thames, Oxon)
- White J, 1981, "Beyond autobiography" in *People's History and Socialist Theory* Ed. R Samuel (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon)
- Williams R, 1961 *The Long Revolution* (Chatto and Windus, London) [若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳(1983)『長い革命』ミネルヴァ書房]
- Williams R, 1976 *Key Words. A Vocabulary of Culture and Society* (Fontana Books, London) [岡崎康一訳(1980)『キーワード辞典』晶文社]
- Williams R, 1977 *Marxism and Literature* (Oxford University Press, London)
- Williams R, 1979 *Politics and Letters* (New Left Books, London)
- Williams R, 1980 *Culture* (Fontana Books, London)
- Willis P E, 1977 *Learning to Labour. How Working Class Kids get Working Class Jobs* (Saxon House, Farnborough, Hants) [熊沢誠・山田潤訳(1985)『ハーマータウンの野郎ども』筑摩書房]
- Willis P E, 1978 *Profane Culture* (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon)
- Wilson S, 1981, "Conflict and its causes in Southern Corsica, 1800-1835" *Social History* 6 33-69
- Wohl R, 1980 *The Generation of 1914* (Weidenfeld and Nicolson, London)
- Worpole K, 1981, "A Ghostly pavement: the political implications of local working-class history" in *People's History and Socialist Theory* Ed. R Samuel (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon) pp 22-32
- Wright E O, 1978 *Class, Crisis and the State* (New Left Books, London)
- Wright Mills C, 1956 *The Sociological Imagination* (Oxford University Press, London) [鈴木広訳(1965)『社会学想像力』紀伊國屋書店]
- Yeo E, Yeo S, 1982, "Ways of seeing: control and leisure versus class and struggle" in *Popular Culture and Class Conflict 1590-1914. Explorations in the History of Labour and Leisure* Eds E Yeo, S Yeo (Harvester Press, Hassocks, Sussex) pp 128-154
- Yeo S, 1981, "The politics of community publications" in *People's History and Socialist Theory* Ed. R Samuel (Routledge and Kegan Paul, Henley-on-Thames, Oxon) pp 42-48
- Zaret D, 1980, "From Weber to Parsons and Schutz: the eclipse of history in modern social theory" *American Journal of Sociology* 85 1180-1201
- Zeleny J, 1980 *The Logic of Marx* (Basil Blackwell, Oxford)
- はその文献がテキストなかでは引用されていないが、重要な出典であることを意味している。

補 足: 分析方法に関するノート

私が本稿で与えてきた再構築された地域地理学の概要は全く自然に、より普通の合成的なアプローチと同様に「生活史アプローチ」一口承史と自伝ないし日記の利用と地域史の手法に優越性を置く。口承史は、コンテクストの知識の豊かな源泉であり、とくにイギリスと合州国(展望として P Thompson, 1978 を見よ)、フランス(展望として、Thompson, 1981 を見よ)、ドイツ(例えば、Niehammer, 1980)、また勿論オーストラリアや太平洋諸国(例えば、Lowenstein, 1978)において、ますます引き出されるようになっていく。口承史は、過去を賛美し、それに敬意を払う手段として価値をもっており、依頼すべき明確な理論的基盤がない時に、説明のための親密な役割において非常に有効になることは間違いない(Paradise and Plummer, 1979)。しかし口承史は現在、移民のような原型的な階級によって構造づけられた経験(例えば、Bertaux-Wiaume, 1977; Bertaux and Bertaux-Wiaume, 1981a; 1981b)や労働者階級の異なった分派の労働経験(例えば、Sennett and Cobb, 1972; Hareven and Langenbach, 1978; Bleitnach and Chenu, 1979; Hareven, 1982)、全体としての社会の生活経験(例えば、Thompson, 1975; T Thompson, 1980)にますます適用されるようになっていく。したがってまた口承史は、例えば社会史や社会学における従来の合成的な説明に、「深奥さ depth」を与えるのに有効な補助手段を提供する。しかしながら現在構築されているかぎりでは、口承史には理論的に一貫した組織化された原理がなく、幅広い集団のタイプという観点を除いて、ほとんど体系化されていない。本稿における説明は以下のことを示唆している。つまり新し

い課題を加えること、特に人格がある特定の地域でいか^{第一者の視点}にして成長するのかを記録することや、社会的結合と共同体の感覚の厳密な内容を示すように努力すること、また慣習行動的な理性を探究することなどによって、いくつかの理論的背景が口承史に与えられるかもしれない。勿論こうした企図に対して、口承史の実際上の限界—データの収集、インタビューの時間、分析の問題など—が設定されねばならない。

したがって自叙伝や日記も、コンテクスト的な課題を探究する際に効果的に利用される(例えば、Burnett, 1974; Delaney, 1976; Macfarlane, 1970; Vincent, 1977; 1980; 1981)。こうした資料の相対的な乏しさ(特に日記)は、特定のコンテクストにおいてこの資料を代表するものとして使用する際に、克服したい少なからぬ問題があることを意味している。しかしひとつの日記でさえ、人格形成、社会的結合などについて莫大な情報を提供し得る(卓越した議論として、Abrams, 1962を見よ)。

最後に、膨大な地域史は、引っ張り出されて再活用されるべき豊かな鉱脈を提供する。元来その性質上かなり牧歌的であったけれども、多くの農村地域史はますます体系的になってきている(例えば、Hey, 1974; Spufford, 1974)。さらに都市地域史という新しい部門が現在、成長している(例えば、White, 1980)。これらの歴史は多くの価値を持っているけれども(White, 1981; Warpole, 1981; Yeo, 1981)、こうした歴史はしばしば、十分にコンテクスト的な意味をたいへん再構成されやすく、またコンテクスト的な諸問題を提起する手段となる(Thrift, 1980と比較せよ)。

この補足の後書きとして、管見のかぎり、文献のなかで用いられなかったひとつの方法を私は示唆したい。それは個人の「再構成」である。この方法は、あるロカール内部における種別化された各個人の生活経路の諸特徴を推論すること、それによってなにがインタビューや日記(私が用いた資料)あるいは自叙伝(Thrift, 1979と比較せよ)のなかに発見されるべき主要な特徴であるのかを示唆することから構成される。

「巻頭」>

<執筆者(1996年現在の所属)、翻訳者一覧>

アン・パッティマー (ダブリン大学、1938年生)

加藤政彦 (大阪市立大学大学院生)

デイヴィッド・ハーヴェイ (ジョンズ・ホプキンス大学、1935年生)

水岡不二雄 (一橋大学)

デイヴィッド・レイ (ブリティッシュコロンビア大学、1947年生)

長尾謙吉 (日本学術振興会特別研究員 大阪市立大学)

エドワード・ソジャ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校、1940年生)

水内俊雄 (大阪市立大学)

デレク・グレゴリー (ブリティッシュコロンビア大学、1961年生)

大城直樹 (神戸大学)・高山健一 (同志社女子大学)

デニス・コスグローヴ (ロンドン大学ロイヤルハロウエイ校、1948年生)

中島弘二 (大分大学)

ナイジェル・スリフト (ブリストル大学、1949年生)

遠城明雄 (東北大学)

社会-空間研究の地平：人文地理学のネオ古典を読む

1996年6月28日発行 (非売品)

編集 日本地理学会「空間と社会」研究グループ

発行 大阪市立大学文学部地理学教室

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138

tel. 06-605-2406 fax. 06-605-2408

振替 00960-9-72384

(口座名称：大阪市立大学地理学教室)

印刷 騰 ホウユウ

〒590 堺市海山町1-8-4

tel. 0722-27-8231 fax. 0722-27-7219
